

『人生地理学』補注補遺（第1回）

斎藤 正二

編集部解題

第三文明社刊『牧口常三郎全集』（全10巻、1981～1996年）の凡例には、「本全集は、牧口常三郎の全業績を、現在の段階までに蒐集可能となった資料にもとづき、能うかぎり原著・原論文のもともとのすがたを復元するよう細心の配慮を注ぎ」、「あくまで原典の復元（＝保存）に忠実であろうとする基本方針を貫いてある」、「下欄の〈脚注〉には、〔…〕原著・原論文の記述内容をよりよく読解（＝享受）するのに必要かつ役立つと思われる本文中の語彙またはフレーズについての語義的注解を主に、ひろく公刊当時の文化風潮に関する解説などを付することとした。〈脚注〉は、原則として、見開き二ページごとに番号を付して本文との照合に支障を来さないよう工夫し、なおいっそう詳細なる注解を必要とする場合には、巻末〈補注〉として該注解を一括して収め、これにも、本文との照合に便なるよう番号を付した」（下線、解題者）とある。

とりわけ、斎藤正二（当時創価大学教授）が編集責任に当たった第1巻『人生地理学（上）』と第2巻『人生地理学（下）』は、まさに博引旁証と呼ぶに相応しい充実した〈脚注・補注〉が見事であり、従来の（つまり同全集刊行以前の）牧口常三郎に関する定説・印象を大きく書き換える上で絶大な功績があったことは、研究者間でつとに知られるところである（牧口研究に与えた同補注の影響に関しては、本誌今号所収の拙稿「斎藤正二の牧口常三郎研究」を参照されたい）。ただし、第2巻『人生地理学（下）』の注釈に関しては、巻末の「編纂・校訂・注釈おぼえ書き」のなかで斎藤自身が次のように述べている。

「本第二巻『人生地理学（下）』に関して是非とも付言しておかなければならぬ必要事項は、次の二点である。（一）脚注は、結論（第四編に当たる）／第三十四章地理学の予期し得べき効果、に至るまでの、全チャプターを残らず取り扱ってあること。（二）補注は、校注者の健康状態および知的準備状況に制約されて、第二編地人相関の媒介としての自然／第十九章気候、の中途までしか取り扱い得なかったこと。せめて第二巻『人生地理学（下）』には、第二編／第二十二章人類、までの六つの章の補注を収載したかったのだが、或る一つの項目に二カ月も三カ月も費やして百枚近い原稿を書いたかとおもうと、その隣りの童謡歌詞の穿鑿に半歳も費やして作者・出典の手懸かりさえ掴むことが出来ず、その結果、編集部の上には第二編第三編各章の補注五〇〇ページ相当分量が積み上げられているにもかかわらず、番号順につながらない個処が箇欠けのごとく随処に生じ、已むを得ず斯くのごとき処置を採らざるを得なか

った」⁽¹⁾（下線、解題者）

その後も斎藤は〈補注〉の残り部分（『人生地理学』第2編第19章「気候」の補注9以降）の完成を目指していたが、健康上の制約もあり（上記おぼえ書きでは「[癌手術で] 脾臓の五分の四と、胆嚢、脾臓と、肝臓のわずかな部分と、要するに内臓三ツ半が切除されてしまっていた」と述べており⁽²⁾、また最晩年の文章にも「この二年五ヵ月の期間内に、わたくしは狭心症で一度、心筋梗塞で二度、脾臓尾部切除後機能検査（この検査が意外に長期に亘った）で一度、都合五たび入院を強いられ、自分なりに痛苦の限りを嘗め味わわされた」⁽³⁾とある）、2011年1月の彼の逝去によってついに未完の儘となった。しかし上記引用文に「第二編第三編各章の補注五〇〇ページ相当分量」が出来ていたとあるように、実はかなりの部分が書き溜められていた。今回、斎藤氏の御遺族の御諒解のもと、補注の未公開部分を〈遺稿〉という形で本誌に連載させて頂くこととなり、御遺族にはこの場を借りて胸奥より深く感謝を申し上げる次第である。

遺稿は『人生地理学』第2編・第3編に亘るが、分量や内容の纏まりから判断し、第3編補注から連載することにした。今回掲載するのは、「第三篇 地球を舞台としての人類生活現象／第二十三章 社会」のための二つの補注である。すなわち、〈補注1〉の「社会てふ語」は、「社会」という日本語が明治近代になってから定着する過程についての解説であり、〈補注2〉の「『社会主義』と云ひ」は、明治時代全期を通じて「社会主義」の思想と運動が辿った推移発展についての解説である。文字通り命を削っての渾身の注釈文をなにとぞ御読頂きたい。

なお、編集に際し、岩木勇作氏（創価大学大学院博士後期課程）に協力を頂いた。

（伊藤貴雄 記）

凡例

- ・表記は基本的に第三文明社刊『牧口常三郎全集第二巻 人生地理学（下）』の補注に準拠する。たとえば、「1 社会てふ語（一九三ページ、注1）」は、同書193ページに見える「社会てふ語」に付された〈脚注1〉のための〈補注1〉を意味する。
- ・原稿は縦書きだがそれを横書きに直した。それ以外は原稿の指示を極力反映してある。文中の引用形式は『全集』補注に準拠し、引用原典（縦書き）の右・左傍線は下線に統一した。
- ・字体は新字に統一してある。旧仮名遣いはそのままとした。
- ・おどり字の表記は次のように改めた。くの字点は「々々」あるいは「ゝゝ」にした。漢字は「々」、かなは「ゝ」「ゞ」、カナは「ゝ」「ゞ」で統一している。
- ・明治時代まで慣用された「ㇿ」「井」「子」「𠂔」などの仮名表記は「こと」「ゐ（中）」「ね（ネ）」「トキ」などに改めた。変体仮名（「𪛗」など）は現代仮名遣いに改めた。

(1) 『牧口常三郎全集第2巻』第三文明社、1996年、549頁。

(2) 同上、545頁。

(3) 『斎藤正二著作選集第4巻』八坂書房、2006年、611頁。

補 注

第三篇 地球を舞台としての人類生活現象

第二十三章 社 会

1 社会てふ語（一九三ページ、注1） 脚注に言及した「日本語『社会』が明治近代になってから定着する過程に関して」参考文献を提示する手続きから始めることにしよう。まず手初めに、やわらかい『読物風』の記事にお眼通しありたいとおもう。やわらかいが案外に学問的良心を以て貫かれたことで戦前に名著と目されて広範囲の読者を獲得していた、あの石井研堂（明治二十年代いっぱい、東京教育社（社長日下部三之介）発行の少年雑誌「少国民」の編集に従事し、当時として教育ジャーナリズムの最先端で活躍していた人物であった）著『改訂増補・明治事物起源上巻』（一九四四年十一月、春陽堂刊）をひらくと、その「第七編教育学術部」に、次のごとき記事に出会う。

社会の語の幼名

漢語の社会は、もと、土神の祭りと、人の集会の語にて、〔正法念經〕第九卷に、『彼の人は是の如く社会等の中に妄語し悪説す』などあり、村人の集りといふ位の意義なり。

それが、明治維新直後には、商事の会社にも、又世の中といふやうな意義にも混用されし。

即ち明治四年版中村氏の〔自由之理〕には、仲間会社とあり、十九年版石川氏の〔大英律〕には、商事会社を社会と訳出せり。

辞書類には、このソサイティなる原語を、最初如何に訳付けたるかを見るに、

- (1) メー氏〔英華辞典〕（一八四七年即弘化四年上海版）には、会、結社
- (2) 開成所版〔英和对訳袖珍辞書〕（慶応三年再板）には、仲間、交り、一致
- (3) 柳澤氏〔英華辞集〕（明治二年板）には、簽證会
- (4) 吉田氏〔英和辞典〕（明治五年板）には、兄弟の因ミ、仲間、交り、社中、会、結社
- (5) 室田氏〔西洋開化史〕（明治五年十二月訳述）凡例に、

一、往々俗間なる語を用は、原語ソシエターの訳なり、此ソシエターなる一字は、衆人相交る所の其民族を称して言ふ辞なり。支那人は会の一字を以て之を訳すれども簡にして意を尽さず、又予嘗て、試に之を俗化と訳したれども、未だ適切ならざるを覚ゆ。又人間世俗、又民衆会合、等の訳ありと雖も、只暫く俗間或は世俗若くは俗化等の訳を用ふ。

- (6) 明治八年五月一日、松山棟庵の、三田集会所開場祝文中に『相互に利害を共にし、得失を同うするの心を生じ、始めて人間会社（ソサイエティ）の趣を為し云々』とあり。

斯く区々に訳出せられてありしが、之を現今の如く、社会を、民衆世態の意に使用せるは、明治九年十月発行の〔家庭叢談〕第十四号が、祖なるべし。

次で同年出版ギゾーの〔文明史〕、同十一年版塚原氏訳〔論理学〕など同じ。

社会学の新語に至りては、尺振八氏の〔斯氏教育学〕、十五年版乗竹氏の〔社会学原理〕を嚆矢とすべく、明治二十六年東京帝大文科大学に、社会学講座を設けらるゝに及びて、始めて一新学名となれり。

社会学の始

社会学は、ギゾー、バツクルの文明史、及びケリーの経済書に系統を引き、スペンサーの社会学、

一時最も盛んに行はれ、有賀氏之を応用して、社会進化論を著はせり。

——このように書写してみると、なるほど、昭和戦前の“読物文化”^{よみものぶんか}、というのは高水準^{ハイ・レヴェル}を極め尽くしていたんだなあと、あらためて感心もし、感服もさせられる。こんにちとは違って映像文化^{メディア}のほうはあまり進歩しておらず、知的好奇心の旺盛な老若男女はもっぱら活字媒体の世界に視線を向けざるを得なかったのだから、いやでも“読物文化”の水準に《底上げ》ないし《高級志向化》の傾向があらわれたのだろうし、それを殊更に賞めそやすには当たらぬではないか、との冷たい見方も、あるいは成り立つかと思う。しかし、それにしては、現代の（この場合、高度経済成長を果たした一九七〇年代以降の日本資本主義社会全体をさしているが）所謂“マスコミ活字文化”^{マスコミ・レヴェル}の低水準^{ロー・レヴェル}よりは覆い隠す^{おおい}すべもないほどに明らかではないか、というのが、当方の反論意見^{オブジェクション}の骨子であるけれど、ここで昭和戦前の“読物文化”に関する論争をたたくまでも仕方無い。（筆者が賞讃^{おほめ}措く^{あた}能わざる戦前大衆文化^{いんど}と雖もなお、現実の幾千万人大衆の眼からすれば「高嶺の花」に過ぎなかったのであり、大多数民衆はといえば義務教育たる尋常小学校の課程を終えたあとには滅多に書籍雑誌に触れる機会さえ与えられていなかった、という客観的歴史事実から出発し直してこそ、はじめて正しい議論が成立すると反省させられるからである。）

——石井研堂の名著『明治事物起源・上巻』所載の前掲記事が押さえてみせる最小限の必須知識は、若き牧口常三郎によって略ぼ完全に収得されてあった。なにしろ、『人生地理学』第三編地理を舞台としての人類生活現象の記述全部がまさしく《社会とは何か》《社会とは如何にあるべきか》《社会をどういう方向に変えていったらよいか》という基本命題と取り組んで一字^{いち}々^じ々^じ深く思索しながら書き進められた作業であるのだから、たんなる言語表現上の用例を比較したり書誌学上の詮索をあれこれ加えたりしてみても、そのような企ては、しよせん、牧口思想の解明にはあまり役立たない（ぜんぜん役立たない、などといった、慎みの無い発言は差し控えるべきであるが）。なにしろ、『人生地理学』は菊判三百ページ余を費やしてまるまる社会に関する記述をおこない（けっして「第二十三章社会」の^{チャプター}章だけで社会に関する追求作業をおこなったのではなかった）、当時としてそれこそ徹底的なる社会科学的探究を押しすすめた著作であるのだから、われわれとして、この時代の（すなわち、明治前期中期ごろまでの）社会学専門分野での「社会」概念の登場→受容→学的確立→定着→普及のプロセスを正確かつ精細に跡づけておく義務に迫られているように思う。

当面の義務遂行^{すいこう}のために、本稿筆者の選んだ手段は、篤学^{とくがく}天折^{てんせつ}の秀才の残した仕事である『下出隼吉遺稿』（一九三二年四月刊、非売品）に準拠して、日本近代思想史（ないし日本近代科学理論史）のなかでの「社会」概念の輸入＝翻訳のありさまや学問的確立＝定着の足どりを明らかにする作業である。なぜ当該遺稿集を特に選んだかという、このテーマを研究対象にして執筆公表された学術論文は昭和戦前には数が少なく、且つ下出作品「明治社会学史資料（一）（二）」（もと『社会学雑誌』第十八号〈大正十四年十月発行〉、同誌第二十三号〈大正十五年三月発行〉に分載されたもの）より以上の高い水準を越えたものも殆ど無いからとの理由にもとづく。晩年の牧

口常三郎は極めて熱心に社会学文献を読み漁った痕跡がうかがえるから、これはおよそ推測の域を出られないことをあらかじめ断わり書きしておかなければならないけれど、しかし、牧口が当該下出論文や下出遺稿著作を視野の下に入れていた「公算」は必ずしも小さくない、と考え、そのこともまた、本稿のこの場所に当該論文必要部分の引用をおこなう第二第三の理由となったことを明らかにしておく。さて、下出論文「明治社会学史資料（一）」の起稿趣旨をば、現在時点から公平に検討してみるのに、「所謂社会学説が本邦に紹介せられて此方、過去四十余年の文献資料が、時の流れと共に、益々散逸する恐れのある今日、之が資料の蒐集整理及研究は徒爾ではない」との立場から、基本文献史料を蒐集し且つ記録せんとするところに、その目標を置いていたことが明白に看取し得る。「震災等により追々古い文献の失はれゆく今日、私は之等の人々の社会学的文献に限りのない愛着を覚ゆると共に、語学の発達未だ充分でなく、研究設備の未だなく、其研究の困難なりし明治の初年、所謂新文化創成期に於いて発表せられた社会学に関する文献資料が、其態様の現時に比して、甚しく稚拙であつたとは云へ、相当苦心せられた跡を見る時、是に敬意を表すると共に、私は今の内に之等文献資料を記録に留めて置きたいと思ふ。」と、みずから記すとおりである。強いて各文献の学問的価値を問う記述を差し控え、材料＝事実の提示を主要目的にして文章を綴ったがゆえに、下出のこの論文は、今日の時点に及んでも、色褪せずに命脈を保つことが可能であり得た。

而して、下出は、明治十六年（「其第一の起点は其實質の如何に拘はらず、恐らくは本邦に於ける最初の著述としての態様を備へた有賀長雄氏の社会学の発表のせられた」年）より明治三十六年（「東京帝国大学文科大学に於いて本邦最初の社会学研究室が開かれた」年）に至る二十年間を「第一の時代」と措定してみせ（それから、大正十二年の関東大震災以前を「第二の時代」とし、それ以後を「第三の時代」とするが、そちらのほうに区分法は必ずしも適切と目し難いと思されるので、今は従わない）、謂うところの「第一時代以前に於いての所謂社会学並びに多少とも社会学に関係のある文献を編年体で挙げれば次の如きものがある。」として、「明治四年／▲自由之理 中村敬太郎訳。原著 John Stuart Mill : On Liberty. 一千八百七十年倫敦出版英国弥爾著。一千八百七十一年（明治四年初冬）新刻。第一冊—第二冊下駿河静岡岡木平謙一郎版、第三冊—第五冊同人社蔵版。」以下の列举をおこなう。

明治八年

▲弥兒經濟論 二十九冊。原著 Principles of Political Economy. 林董訳蔵版二書堂発兌初篇卷六以下林董関鈴木重孝訳英蘭堂蔵版。

明治九年

▲国法汎論 イ・カ・ブルンチュリ著、加藤弘之訳。原著 J. K. Bluntschli : Allgemeine Staatsrecht. 明治九年四月七日出版、近藤圭造出版人。

明治十年

▲欧羅巴文明史 仏ギゾー著、米ヘンリー訳述、永峰秀樹再訳。原書 History of civilization in Europe. New York. translated by Henry. 明治十年六月二十五日出版、東京奎章閣蔵版。

.....

▲生理提要 英国龍動ホクスレー原撰、米国紐育ユーマンス増訂、日本備後小林義直訳述。英蘭堂蔵版。
原書 Thomas H. Huxley : Elementary Lessons in Physiology. 1866. 明治十年四月十六日版權免許。

▲利学 上下二卷。英国弥留氏原著。大日本西周訳述、掬翠楼蔵版。原書 Utilitarianism. 1863. ……
明治十一年

▲交際論附経済 米国ペンシルバニア大学トンプソン著、加藤政之助訳。明治十一年十月出版、慶應義塾出版社発兌、一千八百七十五年原書出版。

▲論理学 全。チャンパー原著、塚本周造訳、大井鎌吉訂。明治十一年十一月文部省印行、百科全書ノ内。

▲斯辺撒氏代議政体論 鈴木義宗訳。原書 H. Spencer : Representative Government. 明治十年十二月出版、翠濤軒蔵版。

▲立法論綱 ベンサム原著、島田三郎重訳。原書 Introduction to the Principles of Morals and Legislation. 1789. 明治十一年五月御用書物師律書房發行。

……………

明治十三年

▲斯氏教育論 尺振八訳。原書 ス氏 Education ; Intellectual, Moral and Physical. 1875. New York. 明治十三年四月發行、文部省版權所有。

▲斯辺撒氏干涉論 全。鈴木義宗訳述、原著者 H. Spencer. 明治十三年二月發行、耕文舎蔵版。
明治十四年

▲社会平権論 英国抱巴士斯辺瑣著、松島剛訳。原書 H. Spencer : Social Statics. 1864. 2nd. edition. 著者小伝原著者序文及米国版序文あり。明治十四年五月同年六月卷二、最後に明治十七年二月卷六出版大野堯運出版、報告社発兌。

▲哲学字彙 英人弗列冥の哲学字典を根拠とし、井上哲次郎氏及和田垣謙三、国府寺新作、有賀長雄諸氏等の編纂せるもの。

▲女権真論 英国ハーバート・スペンサー氏著、日本井上勤訳。明治十四年一月發行、思誠堂蔵版。
明治十五年

▲社会学之原理 甲乙。外山正一関、乗竹孝太郎訳述。原書 H. Spencer : The Principles of Sociology. Ist. Vol. 發行年月日同書に附記せられず、但し訳者序に「明治十五年四月」の記録あり。本訳書は東京経済学講習会に於いて講義録を發行するに当り訳せるもの、訳は原文に必しも拘泥せず。

▲権理提綱 改訂。英国斯辺瑣著、尾崎行雄訳完。原書 H. Spencer : Social Statics. の抄訳、明治十五年六月再版。丸善齋書房出版。

初版出版の時期は不明、但し訳者序に「即ち其権理を論ずる者十有余篇を抄訳し題して権理提綱と云ふ爾来既に五星霜を経過し」とあれば明治十一年前後かと思はる。

△刑法原理獄則論綱完 英国学士 波・斯辺鎮氏著、日本山口松五郎訳。明治十五年十月印行。

△社会哲学 全。林包明著。明治十五年七月出版、著者蔵版。

△人権新説 全。加藤弘之著、谷山楼蔵著。明治十五年十月出版。

△自由之理評論 土居光華、漆間真学合訳。原書 Henry Thomas Buckle : An Essay on Mr. Mill's Liberty. 明治十五年九月出版。

△政治真論 一名主権弁妄、英国ベンサム著、日本藤田四郎訳。原書 Bentham : A Fragment on Government. 明治十五年七月印行、自由出版会社發行。原著者小伝あり。

△国家生理学 二編。独国学士仏郎都著、訳者不明但し序文は九鬼隆一氏。原書不明、 Frantz : Die Naturlehre des Staates. かと思はる。第一編明治十五年十一月訳行第二編明治十七年十二月訳行、文部省發行。

斯く列挙をおこなったあと、下出隼吉は、みづからが謂う第一時代に先立つ初期時代にあら

われた「社会」概念ないし「社会」術語事例から得られる一般性格を総括してみせる。

「以上の如きものが、私の知る所では、第一時代以前のものとして数えらるゝが、其大部分は翻訳又は翻案であり、而して当時の社会状態の然らしむる所か、其大部分は政治論として、或は夫れを目的として紹介せられて居り、学問をすることそれは天下国家を論ずるが為めであると云ふが如き書生論的な風が之等の文献に遺憾なくあらはれて居る。只乗竹氏訳社会学之原理は大分趣きを異にして居れど、之とても外山氏の序文には学問即天下国家を論ずると云ふ風がいくらか現はれて居り、著書として発表せられた林包明氏の社会哲学の如きに至つては、今日の所謂社会哲学とは全く趣きを異にして、其殆んど大部分は政治論である。従つて此時代に於ける社会学説の傾向等に就いては殆んど注意すべきものはない。」と。そして、さらに、これら用字例に対して一層詳細なる分析的注解を加えてゆく。下出が示すその分析的注解が、幸運にも、われわれのこの補注作業を大いに後方援助してくれることになるのである。

只茲に記す可きは、今日社会学と訳されて居る Sociology なる言葉が最初如何に翻訳せられたかと云ふことである。私の知る文献に就いて云へば本邦に於いてコムトの社会学説が稍具体的に紹介せられたのは先に掲げた明治十一年十一月文部省印行の塚本周造氏訳の『論理学』が恐らく最初ではなかつたかと思はれる。

註。之より一ヶ月先、即ち明治十一年十月に出版せられたる加藤政之助氏訳『交際論』にはコムトの名が現はれて居り、学説の一端が述べられて居れど、塚本氏訳の『論理学』程具体的なものではなく、次の如き句があるのみである。

「コムトの曰く学問の真味は前言の力にありと故に其前言す可らざる者は之を学問と云ふ可らず例令へば舎密学の如く何にても二つの元素或は其混合物の親和に依て何々の混合物を生ず可しと前言するを得るが故に之を舎密の学問とこそは云ふなり。」

塚本氏訳『論理学』の第九十二頁以下には次の如き句がある。

「オーグスト・コント氏始て學術にこの二大區別を建て而して所謂、^{ゾグライント}拔類学科を分画したること至て厳明なり、其説に由れば則算学、星学、理学、化学、生活学、^{ゾグライント}交際学は拔類学科にして六種の根元たる性質及び功用に適合す夫れ算学は数、量、度を説き星学は中心に偏向することを論し物理学は凝聚して形を成せる物体を論し化学は同しからざる物質の親和を論じ生活学は動植物の生活する所以を論じ^{ゾグライント}交際学は人生交際の設立を論ずる者と定めたり。○斯く学科の次序を立てたるも同氏の説に依れば是を自然至当の次序となし是等の學術始て發明せられし順序も亦此の如しとなし且此数者を学ぶにも亦此の序に従て漸々に進めは則ち其理を了会し得ること至て易しといふ。

とあり、又同書第百十四頁以下には次の如く書いてある。

「^{ゾグライント}交際学は人間社会の理を講ずるの学にして其論する所の発象多端にして前に位する五大学科の理悉く存せざる無ければ則之を末位に置けり夫れ^{ゾグライント}人世交際の態情は無機体有機体の性質と万物の靈たる人心の性質とに基きて成る而して人及び社会の生命皆是の学科に論ずる所の理を離るゝ能はず是の利を益々能く証明し得るときに生命も亦益完好なるを得べし、人間の交態は人心天然の性質に依頼すること更に近密なるが故に他の諸学の尙未だ明ならざりし時代より世人既に人心の理法と共に交際を其浅短の思想に由りて講究せり然れどもコント氏曰く他の諸学開明に進めば^{ゾグライント}交際学も亦然らざるなきことの証左史冊上に歴々たりと、^{ゾグライント}交際学は平和進歩の両語ありて各其意を異にすること猶器械学に動靜二別あり生活学に生活成長の両力ありて之を論別するがごとし平和とは交際の情態変易することなく依然として平和なるを謂ひ進歩とは交際の情態変易して更に善に進み例は奴隸より自由に進むが如きを謂ふなり蓋此の二者を判然論別するを得ば交際を知り歴史を觀るに大なる裨益あるべし」(以下省略)

本書によれば Sociology なる言葉は交際学と訳されて居り（交際学なる語は加藤政之助氏訳の『交際論附経済』に既にあれど果して Sociology を交際学と訳したるものか、或は社会主義のことを云へるものか訳文に就いては余り明らかでない）、現今謂ふ所の静学、動学は平和、進歩と訳されて居るのが見られる。尚右に掲げた文章の中に、一ヶ所「社会」と云ふ言葉が現はれてゐる。英語の Society を社会と訳したのは明治九年頃からかと思はれる。私の知る所ではギゾーの欧羅巴文明史の翻訳の内明治九年五月に出版された巻七に「其人民の結んで一体の社会となりたる時代」とあるのが最初かと思はれる。そして最初は専ら三田系の人々に用ひられたものと見え、明治九年十月二十三日発行の家庭叢談第十四号に「必ず日本社会に於て選び抜きの士なる可し。」又同十五号に、「今暫く大空社会の話を止め、我々の人間社会の事に及ばんとするに此社会の事柄も等しく釣合を保たずしては順序の立たぬものなり。」（『新旧時代』第一巻第一号参照）等とありて社会なる言葉が使はれて居るのが見られる。之より以前にては私の見る所によれば、慶応二年出版の英和辞典には Society を仲間、一致、交り等と訳して居り、又明治四年出版の『自由之理』（ミル原著中村敬太郎訳）には Society を仲間、会社と訳して居り、Social liberty を人倫交際上の自由等と訳して居る。之に依つて見れば塚本周造氏訳の『論理学』が出た頃は「社会」と云ふ言葉は、未だ一般に普及されて居らず、一部の人々にのみ使はれて居つたものと見え、塚本氏の文章には Society を「社会」と訳したのは只一ヶ所だけで、あとは多くは「交際」と訳して居り、従つて Sociology をも「交際学」と訳したものだと思はれる。

現今一般に用ひられる「社会学」と云ふ学名が文献に表はれたのは、尺振八氏が明治十三年四月にスペンサーの教育学を翻訳した、「斯氏教育論」が最初ではないかと思はれる。

即ち同書の第一篇「何を以て最大の価値ある学識とするやを論ず」の第五十三頁の終りに次の如き句がある。

「茲に又人生事業の成否に直接の關係を有し、吾輩の當に注意せざるべからざる一科の學術あり、社会学なるもの則是なり。今夫れ日々金銭通利の景況を考へ、貨物の時価を察し、予め穀物、綿、砂糖、羊毛、絹等の収獲の多少をとし、戦争の勝敗を計り、以て商業上の処置法を判決する人は、即ち、社会学を学べる者と謂ふべし。其行ふ所は固より経験上の臆断を逞ふるに過ぎずして、許多の誤謬を免れざるべし、然れども尚其考究判決する所、善く真理に合ふと否らざるとに由て、或は賞賚を得、或は其利得を失ふ所の社会学の生徒なりと謂はざるを得ず。」云々

とある。Sociology を尺氏は社会学と訳されて居り、Society は凡て社会と訳されて居る。併し乍ら Sociology を社会学と訳することは未だ一般に、殊に当時の学界のオーソリティーであつた東京大学辺の人々に認められなかつたものか、之より後に著はされた、明治十四年四月出版の恐らくは我国最初の哲学辞典とも看做される『哲学字彙』には Sociology 及び Social Science を「世態学」と訳されて居る。而して此頃には最早一般に「社会」と云ふ言葉は普及したものか Society は此哲学字彙にも矢張り社会と訳されて居る。同哲学字彙には東京大学三学部（法文理）印行とあり、井上哲次郎博士が中心になつて編纂されたもので、同氏が漢文体で序文を書いて居られる。其序文は次の如く書いてある。

此書^{フレイシグ}起_二 英人弗到冥氏哲学字典_一 而起稿。然該書不_二 多載_一 近世之字_一。因与_二 文学士和田垣謙三、文学士国府寺新作、並有賀長雄等_一 徧搜_二 索諸書_一 所_二 增加_一 甚多。云々

とある。之に依れば哲学字彙編纂に就いては、有賀長雄氏も關係せられた様子であれば、或は Sociology に関しての言葉は、主として有賀氏が訳されたものではないかと思はれるのである。尚同書には Sociology に関する術語として次の如く翻訳せられて載せられて居る。

Affinity 異性婚姻、Association 投合、Bigamy 一夫兩妻、Community 社会、Consanguinity 同姓婚姻、Cooperation 協合、Cosmogony 社会啓発論、Cosmophyly 社会化醇論、Descent of Man 人類成來、Distribution 散布、分配、Dynamics 動勢論（世態学）動学（物理学）、Endogamy 同族婚姻、Evolution 化醇、進化、開進、Theory of evolution 化醇論、進化論、Exogamy 異族婚姻、Factor 要素、Gentile system 氏族割拠、Heterogeneity 瘡雜、Homogeneity 純一、Marriage 婚姻、Monogamy 一夫一妻、Positive Philosophy 実験哲学、Synthetic Philosophy 総合哲学、Polyandry 一夫多妻、Polygamy 一妻多夫、Primitive Man 原人、Product 成果、Race 種属、Relation 威統、Socialism 社会論、Statics 静状論

(世態学)、静学(物理学)、Structure 結構、Trogloodite 穴居人種、Union 情交等。

即ち之に依つて見れば、以上の如き用語が、当時の所謂世態学に、多く用ひられて居つたものと見られる。而して之を、此哲学字彙に次いで出版せられたスペンサー原著乗竹氏訳『社会学之原理』(明治十五年出版)並びに、有賀氏の『社会学』(明治十六年出版)と対照して考察して見れば、之等の言葉の多くが、スペンサーの社会学を説くに最も多く使はれた言葉であり、之より後、第一の時代の丁度中頃に当る明治二十六年、東京帝大文科大学に始めて社会学講座が設けられ、外山博士が同講座を担任せられる頃迄スペンサー社会学が我学界に最も重要な地位を占めたが、之等の傾向は既に此頃から表はれて居つた事が以上掲げた術語によつても窺はれるのである。

尚 Sociology を此頃未だ社会学と訳さなかつたのは東京大学の人々の許りでなく、哲学字彙が出版せられた同じ年に表はされた、スペンサーの Social Statics を翻訳せる松島剛氏訳『社会平権論』にも、最初に掲げられたスペンサー小伝には Principles of Sociology を社会原論と訳して居り、社会学原理とは未だ訳されて居なかつた様である。

以上の如き有様で我国では最初 Sociology を翻訳するに、交際学とか世態学とか、或は社会学社会原論とか訳して一定して居らなかつた様で、一般に社会学と云ふに至つたのは私の思ふ所では、スペンサー原著乗竹孝太郎氏訳の『社会学之原理』以後ではないかと思はれる。同書はスペンサーの The Principles of Sociology を翻訳したもので、外山正一博士が、風変りな現代の學術書には一寸見られない、新体詩で序文を書いて居られる。此書が出版せられた頃は、丁度我国に新体詩が流行り初めた頃で外山博士は可なり之に熱中せられ、井上哲次郎博士等と明治十五年五月に我国最初の『新体詩抄』を丸善から出版せられた程の事であれば此社会学原理にも新体詩で序文を書かれたものと見える。同序文には次の如き句がある。

前略、之に劣らぬスペンセル、同じ道理を拡張し、化醇の法で進むのは、^{その}面あたり見る草木や、動物のみにあらずして、凡そありとしある者は、活物死物それのみか、有形無形其れ々々の、区別も更に無かりしを、真理究はめしその知識、感ずるも尚余りあり、されば心の働きも、思想知識の発達も、言語宗旨の改良も、社会の事も皆都て、同じ理合のものなれば、既にものせる哲学の、原理の論ぞ之に次ぐ、生物学の原理やら、心理の学の原理をば、土台となして今更に、社会の学の原理をば、書にものせらる最中ぞ、此書に載せて説かるゝは、その社会とは何ものぞ、其発達は如何なるぞ、その結構に作用に、社会の種類如何なるや、種族と親と其子等の、利害の異同如何なるや、男女の中の交際や、女子に子供の有様や、取扱の異同やら、種々な政府の違いやら、違いの起る原因や、僧侶社会のある故や、其変遷の原因や、儀式、工業、国言葉、知識美術や道德の、時と場所との異同にて、遷り変りて化醇する、その有様を詳細に、論述なして三巻の、長さ文にぞせらる可き、
(以下少しく略)

とある。少しく冗長に失する嫌ひはあれど、此序文はスペンサーの学説の紹介とも見られ、或意味に於いては外山博士の社会学説とも見らる可く、又之には外山博士の如何にも疎放洒脱な風格の現はれて居ることであれば今少しく掲げてみると、同序文の終りには、

広き世界の其中に、恐る可き者多けれど、^{めくら}盲人同士の戦ひに、越したるものはあらぬかし、狙ひきまらぬ棒打ちの、仲間入りこそ危ふけれ、今の世界は^{つむじかぜ}旋風、烈しく旋る時なるぞ、烈しき中へツイ一寸、巻きこまれたら運のつき、足もすはらず^{めくらめ}瞑眩き、頭は最とゞぐらつきて、くるゝゝゝと廻はされて、透間もあらず廻はされて、あげくの果ては空中へ、巻きあげられて落とされて、始めて曉る其時は、早や遅そ蒔きの^{とうがらし}辣椒、後悔前きに立たぬなり、^{はやて}颶風烈しく吹くときは、その吹く中に過まりて、船を入がれぬ舵取りの、上手とこそは云ふべけれ、政府の舵を取る者や、輿論を誘ふ人達は、社会学をば勉強し、能く慎みて軽卒に、働かぬ様願はしや。明治十五年四月ゝ山外山正一識。

とある。Sociology を社会学と翻訳して居られ、Society を社会と云はれて居る。而して私の見た所の文献によれば之より以後一般に「社会学」と云ふ学名が用ひられる様になつたものと思ふのである。

以上のごとき克明精細を極める追跡作業の成果が公平かつ好意的に評価せられることとなり、下出隼吉説（すなわち「社会」Society ; Société の^{ターミノロジー}学術用語は概ね明治九年ないし十年ごろまでに成立し、「社会学」Sociology ; Sociologie のそれも明治十五年以前に公認されていた、という文献的事実を証した学説）は、昭和戦前から第二次大戦後まで久しく定説＝^{パラレル}通説の位置に在りつづけている。じじつ、こんにちに及んでもなおこの位置を追われてはいないし、前掲石井研堂『明治事物起源』所説と^{なら}雙んで、ごくごく当然の事柄のように斯学後進人士から引用ないし再引用されているのを、屢々眼にするのである。そして、石井所説および下出所論に見える客観的学問事実は、若き牧口常三郎も必ずやこれを自己学問視界のなかに押さえ得たことであろうとおもわれるし、もしかすると、その晩年期には下出論文そのものの石井著作そのものを入手し且つ精読したこともあり得なくはないとおもわれる。本補注が敢て少なからざるページを割いて「社会てふ語」のいわく来歴の解明に努めた^{つと}所以である。

しかし、第二次大戦後における日本の学問の高度成長はまことに素晴らしく、自然科学方面のみならず社会科学・人文科学の領野においてさえ驚くべき新研究が為され新成果が続々と樹立されていった全体的趨勢のなかで、そのほんの一部分である語彙成立史の研究も当然ながら長足の進歩を遂げた。すべては《平和》と《繁栄》とのおこぼれを頂いたと評して差し支えないが、昭和戦前ならば或いは軍隊に取られて^{ひごう}非業の死を強要されたかも知れない秀才たちが、いのちながえて^{じやくなんじ}若年時からの宿題＝懸案をつぎつぎに解決し、それらを論文形式や単行本形態で世間に発表する^{チャンス}好機に恵まれたとは、なんとも幸運だった、としか言いようもない。あらためて、^{たいへい}泰平の世、^{しょうへい}昌平の世に生まれ合わせた喜びを、我れ^わ他人^{ひと}ともに確認しておきたい。そのような第二次大戦後の文化状況であつたればこそ「望外の」、もしくは「予想外」の^{じゅんりょうかじつ}醇良果実に恵まれた事例のひとつとして、ここで、ぜひとも紹介したいのは斎藤毅『明治のことば—東から西への架け橋—』（一九七七年十一月、講談社刊）という書物である。斎藤毅は一九一三年（大正二年）山口県に生まれ、東京大学文学部国文学科を卒業し、昭和戦前期に満洲へ渡って建国大学助教授となったが敗戦に出会い、引き揚げ者として日本に戻る。帰国後、国立国会図書館に勤務、のちのち国会図書館副館長の重要ポストに陞進するまで「ライブラリアン（司書・図書館員・^{しりょうや}史料屋と訳す）」ひと筋に精励^{かつきん}恪勤^{つと}これ努めた、という経歴を持つ。国立図書館短期大学設立にともない、教授として迎えられ、のち同短大学長に任ぜられた。この書物の「あとがき」に《自己素描》および《自著相対化》の文章が見える。あくまで謙抑で、「最後のリベラリスト」の面目躍如たるものがある。「著者は、国語学の専門家ではない。さりとて、別の専門領域に深い知識をもっているものとも申しがたい。したがって、できあがった本書は、国語学の専門書でもなく、それぞれの領域の研究書ともいえない。いうなれば、ことばと文献を通路として明治という変革の時代を探索した奇妙な思想史としか考えられない。古風なよびかたをするならば『雑纂 明治の日本語』とでも題したい本である。このような本を書くにあたって、著者は、ともすれば個々のディシプリンに深入りしたい誘惑に駆られた。だが、もしも、そのような誘惑に身をゆだねたならば、それこそ物笑いの種になるのが落ちであり、ライブラリアンというものの名誉をいちじるしく損ずるに決ま

っている。したがってわたくしは、個々の専門領域に深入りすることと、すでに数多くの成果を得ている国語学の分野に足を踏み入れることも、要心ぶかく慎んだ。／また、もともと、本務のかたわらで、断片的に見つけだした時間を拾いながらできる仕事をと、ねらいをつけ、そのようにして書き溜めたり発表したものの寄せ集めであるから、当然、最終的には一貫した立場でとりまとめる必要があったし、著者自身もはじめからその予定でいた。ところが、この一年、まるで厄病神にとりつかれたかのように、たびたび体調を損じ、一貫した立場から再調整する時間と心の余裕を失ってしまった。」うんぬんと。斯様に自己抑制＝自己統御のすべを知るオールド・タイプの人文主義者が静かに（つまり、大向うの喝采など一切考慮外に置いたの意だが）すこしずつ「書き溜めた」ものの「寄せ集め」であつたればこそ、この斎藤毅が遜讓自称する『雑纂 明治の日本語』、一名『奇妙な明治思想史』は、今後も静かなる好著＝名作として、かならず高い評価を受けることとなるに違いない。

さて、現物のほうの斎藤毅著『明治のことば—東から西への架け橋—』であるが、「第一章 明治の日本語」のチャプターは、この書物全体への「序章」を成しており、まず日本近代の黎明期に当たって、邦語および漢語に絶望した森有礼・前島密・神田孝平・外山正一・肥塚龍らが英語を以て日本語教育の中心部に置こうとした有名な歴史的事実をスケッチするところから書き起こす。明治初年の知的指導者はそれぞれに日本語改良のプログラムを所有し、それぞれに苦悩し、努力を重ねたのである。そして今日の日本で使われている「多くの学術用語が、すでに明治二十年代半ばに充足され、それが次第に一般国民のあいだにも根をおろしてゆき、明治二十七、八年戦役ののちには、中国をはじめ、漢字を用いている東洋諸国にも輸出されたという事実は、すでに多くのひとの指摘しているところである。」と記し、日本近代を理念的＝内部的に支えた学問上の術語の大半が明治二十年代につくられた事実をスケッチする。そのうえで、つぎのような注意喚起をおこなう。「明治二十年代につくられた学術用語が、しばしば学会や訳語会の議決という形をとっているのは、おそらく、そういう過程を、意識的・人為的に、短期間のうちにつくりだそうと試みたものであろう。だが、このようにして人為的につくられた学術用語も、われわれが仔細に観察してみると、ひとつひとつが案外ながい歴史を秘め、驚くほど多くのひとたちがその制作に参加していたことが知られる。／たとえば、斎藤静氏の数数の実証的な研究が示してくれるように、明治時代につくられたにちがいないと信じ込まれていた科学技術関係のことばの多くが、思いもかけず徳川時代の蘭学者たちによってつくられているのである。／科学技術関係ばかりでなく、人文科学や社会科学関係の分野で、もっぱら近代の思想を表わし、すぐれて近代的な観念を象徴しているとみられている明治語のなかにも、徳川期もしくはそれ以前に誕生したと思われるものがすくぶる多いのである。ということは、明治の知識人の教養のなかに、日本の伝統的な学問が、いかに深く沁み込んでいたかということでもある。徳川末期の蘭学者や明治開化期の啓蒙学者の基礎教養の背後に、宋儒の学や徂徠学や国学などに培われた独特の日本思想の成熟があったことを、われわれは忘れてはならない。／徳川時代という、あまた閉鎖的な社会にあっても、日本の諸学は、すでに、予想外に大きい近代化の芽を準備していたので、明治に入って澎湃たる

西洋文明の流入に出会わしても、これに圧倒されることなく、十分にそれに堪え、みずからの思想や世界観で、これを解釈し受容することができたのである。その媒体となったのは、すべて古い漢語であったが、それらの古い漢語は徳川期の学問の発達によって、すでに、まったく新しい内容と意味を付与されていたものである。そこに、新しい時代の新しい思想を担う明治のことが、過去の蓄積と成長のなかから生み出され、鑄造された秘密があるのであろう。」と。

これが斎藤毅本人の所謂「一貫した立場」からの《明治語の思想史》の主要楽句 ^{ライトモティフ} Leitmotiv ということになる。斎藤は、この立場から「社会」「個人」「自由」「権利」「哲学」「演説」「会社」「銀行」「保険」などの日本近代学術用語の誕生状況や形成過程を明らかにしようと図る。当面、特に参看すべきは「第五章 社会という語の成立」の ^{チャプター} 章である。この章は、さらに「一 『ソサエティー』の訳語にこまる」「二 社会という語の成立の時期と制作者についての諸説」「三 社会という中国語の意味についての先学の研究」「四 社会という文字の日本での初見」「五 社会ということばと観念が定着するまでのその類語」「六 社会と社会学の成立」というふうに六つの ^{セクション} 節に分たれ、どのセクションも ^{かんか} 看過すべからざる内容の記述であり、例の久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』や中国語「社会」語源語法に関する言及の部分などはほんとうは欠かせないのであるが、^{スペース} 余白の都合じょう、以下、五番目のセクションのみ引用するにとどめざるを得なかった。

五 社会ということばと観念が定着するまでのその類語

日本で「社会」という文字がみられたのは、すでに文政九年（一八二六年）であったが、それが今日の SOCIETY にあたることばでなかったことは前項で述べたところである。日本で SOCIETY の訳語として「社会」の語が一般的に使用されはじめたのは、大久保利謙氏がいわれるように、明治十年（一八七七年）ごろであったとみるのが妥当であろう。

しかし、「社会」なる語を試みに使用しはじめたのは、それよりは一年乃至二年くらい前の、明治八年か九年であったようである。

だが、それはそれとして、ここでは、「社会」という語が一般に普及するまでに用いられ、また一般に普及しはじめた後まで、並行的に用いられてきた、その類語を一応洗ってみることにしたい。その類語として、われわれは、つぎのようなことばを発見する。

会 公会 会社 仲間会社 衆民会合
社 結社 社友 社交 社人 社中
交社 交際 世交

人間 人間道徳 人間仲間 人間世俗 人倫交際
懇
仲間 組 連衆 合同 一致 仲間会所 仲間連中
為群 成群相養 相生養（之道） 相済養
世俗 俗化 俗間 世間 世道 世態
民 人民 国民 邦国 政府

明治のひとたちは、これらのことばを、いろいろと使ってみて、最後に「社会」に落着かせた模様であるが、明治十年以後においても SOCIETY を会社とも交際とも世態ともいい、特に世態の方は SOCIOLOGY に対する「世態学」ということばのなかに、可成り後年まで残されていた。

また「社会」の語も、たんに SOCIETY の訳語としてばかりでなく、COMMUNITY とか ASSOCIATION とか PUBLIC とかの訳語としても使われ、訳語としての安定性が一きよに獲得されたわけではない。

この間の事情を、文献に即して理解するために、SOCIETY の訳語と「社会」という語の使用例を、年代を追って採録してみると、つぎのような一覧表ができる。

寛政八年——一七九六年 交ル 集ル (Genootschap) (稲村箭『波留麻和解』江戸ハルマ)

弘化四年—五年・一八四七年—四八年 会 結社 (SOCIETY)
(W. H. Medhurst : English and Japanese Dictionary. Shanghai.)

元治元年——一八六四年 仲間 懇 交り (société) (村上英俊『仏語明要』)

安政二年—慶応二年・一八五五年—一六六年 会社
..... (古賀増『度日閑言』)

慶応二年・一八六六年 仲間 交り 一致 (society)
(堀達之助等編・堀越亀之助改訂『改正増補英和对訳辞書』)

慶応二年・一八六六年 公会 人間公会 相済養する道 (津田真一郎『泰西国法論』)
第三章 故に国は人間公会の尤大にして其体裁全備せる者と知る可し。
第四章 国の尋常公会と異なる所左の六件に在り。
.....

慶応三年・一八六七年 社人 (内閣官報局『法令全書』上)
第二十三 徳川内府大政返上將軍辭職ノ請ヲ允シ撰閣幕府ヲ廢シ仮ニ三職ヲ置ク (社人ニ布告) 十二月十八日
第二十三 別紙之通列藩へ被仰出候於社人ノ輩モ同様相心得報公ノ志不可怠旨御沙汰候事 (別紙ハ第十七ニ同シ) 十二月八日
(備考) 幕府が大政を奉還し、新政府に総裁・議定・参与の三職が置かれたことを天下に布告した文章で「宮堂上へ諭告」「列藩ニ布告」「社人ニ布告」の三部分から成っている。

明治三年・一八七〇年 交際 (森有礼『備忘第二日録』)
右は、明治三年の渡米日記中に、「交際之理 (専ラハバルト、スベンサル氏ノ説ヲ引用ス)」(森有礼全集第二巻所収)とあるによって。明治十年代の後半に和訳本の出版された Herbert Spencer : Principles of Sociology. に関係のあるメモかと思われる。

明治三年・一八七〇年 交際 (加藤弘之『真政大意』)
造化ト申スモノハ、実ニ奇々妙々ナモノデ、又別ニーツ結構ナ性ヲ賜ハリテアルガ、夫レハ又何ヂヤト云フニ、所謂仁義礼讓孝悌忠信杯云フ類ヒノモノデ、人ニハ、必ス是等ノ心ガアルモノ故、人々今日ノ交際ニ於テ、各々尽スベキ本分ト云フモノガアリテ、己レ独リ都合ヨキコトナレバ、何ヲシテモヨイト云フコトハ決シテ己レガ權利ノミヲ恣ニシテハナラス。……ソコデ、簡様ナ道理カラ自己ノ本分ヲ尽シテ、他人ノ權利ヲ敬重スルハ、即チ義務トモ称スベキモノデ、人タル者ノ須臾

モ忘レテハナラヌコトデゴザル。左様ナ訳故、今日ノ交際ニハ、必ス此權利ト義務ノニツカ、実ニ欠カレヌモノデ、權利義務共ニ相須テ、真ノ權利ニモナリ義務ニモナル。

明治四年・一八七一年 相生養

（神田孝平『性法略』）

第二条 人ノ世ニ在ル相生養セルヲ得ス 命ナリ

第三条 相生養ス、故ニ万般ノ事依テ以テ興ル

（備考）右の「相生養」が津田真一郎『泰西国法論』（前掲）にみえる「相済養」とともに、「地生養万物、地之則也」（管子）「善生養人者、人親之、善班治人者、人安之」（荀子）「父能生之不能養之、母能食之不能教誨之、君者已能食之矣、又善教誨之者也」（荀子）等の典拠によって案出したことは推察に難くない。……

第二節 人ノ大地ニ在ルヤ他ノ人々ト共ニ相生養ス 理勢便チ然リ

第三節 人既ニ相生養ス 乃チ人々ノ際ニ許多相関スル道非サルコトナシ

第十三節 性法ノ準スル所三ツアリ 第一ニハ 衆人共ニ相生養スル者彼此交相関スルノ道ニ於テシ（是ヲ私同法ト謂フ）

明治四年・一八七一年 人倫交際 仲間会社 仲間会所 仲間連中 政府 邦国一体

（中村正直訳『自由之理』）

此書ハ、シヴール リベルテイ〔人民ノ自由〕即チソーシアル リベルテイ〔人倫交際上ノ自由〕ノ理ヲ論ズ。

蓋シコノ性気アリテ又能ク修養スル人々、寄り合ヒテソサイテイ 仲間会社 トナレバ、ソノ職分ヲ為シ、邦国ヲ保護スルコトヲ得ルナリ。

（備考）右のほか、中村は「仲間連中 政府」（society）「ソーシアル、リレーションス 人倫」（social relations）「仲間会所 政府」（society）「交際ノ間」（Social relations）「政府」（society）など、さまざまな使い方をしており、訳語が一定していない。

明治五年・一八七二年 仲間 組 連中 社中（SOCIETY）

（James Curtis Hepburn : Japanese and English Dictionary）

明治五年・一八七二年 俗間 世俗 俗化

（室田充美訳『西洋開化史』）

往々俗間ナル語ヲ用フルハ原語ソシエターノ訳ナリコノソシエターナル一字ハ衆人相交ル所ソノ民俗ヲ称シテ云フ辞ナリ支那人ハ会ノ一字ヲ以テコレヲ訳スレドモ簡ニシテ意ヲ尽サズ又余カツテ試ニコレバ俗化ト訳シタレドモ未ダ適切ナラザルヲ覺ユ又人間世俗又衆民会合等ノ訳アリトイヘドモタゞ暫ク俗間アルヒハ世俗若クバ俗化等ノ訳ヲ用ユ

明治六年・一八七三年 ナカマ クミアイ レンシヨ カウサイ イフヂ シヤチュウ
会 会社 連衆 交際 合同 社友（society）

（柴田昌吉・子安峻訳『付音挿図英和字彙』）

明治六年・一八七三年 成群相養 人間

（西周『生性発蘊』）

ソシアリッチ、英、愛ニ成群相養ト訳ス、動物ノ等上レル者ハ此性ヲ有ス、而シテ人ヲ最トス、政府ヲ立テ国ヲ建ル此性ニ本ツク

（備考）私記に「大夫以下成群立社曰置社」とみえ「成群」と「社」とのつながりが注意されている。

而シテ生体学ハ、人間学ノ廓廬トナルカ如シ
ソシオロジー

明治七年・一八七四年 相生養ス

(加藤弘之『国体新論』)

蓋シ人ハ禽獸ノ如ク唯天然ニ同居シテ全ク各個ニ生活シ得ヘキ者ニアラス、必ズ互ニ相結ヒ共ニ国家ヲ成シテ人々相生養スヘキ天性アリ

明治七年・一八七四年 相生養ス 人間会社 人間仲間

(津田真一郎訳『表紀提綱一名政表学論』政表課刊)

表紀ノ原語ヲスタチスチキト謂フ。其義ヲ直訳スレハ邦国又ハ形勢ト謂フ事ナリ。蓋シ一國數國乃至万国ノ人民互ニ相生養スル實際ノ形勢ヲ知ル學術ナリ。此形勢ヲ名ケテ人間会社又ハ人間仲間ト謂フ。

表紀ハ人間仲間ノ事實ヲ知ル學問ニシテ、其目的ハ其事件ノ現ニ存シ、實ニ有ルヲ表章スルニ在リ

明治七年・一八七四年 世道

(西周『洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論』明六雜誌、第一号)

衰弊ノ極救薬スヘカヲササルニ至ルハ亦獨リ政府ノ罪タルノミナラス抑其國人民自己世道上ノ罪ニテ、苟モ賢智ノ徒タラントスル者ハ先ンシテ之ヲ救フコトナクハ亦世道上ニ於テ罪ナシト謂フヘカラス。

明治七年・一八七四年 社会

(西周『非學者職分論』明六雜誌、第二号)

民間志氣ノ振フナリ、社会ノ立ツナリ極メテ可ナリ。朋党ノ興ルナリ、遂ニ一揆ノ始マルナリ、極メテ不可ナリ。

(備考) 右の社会は、個人の相寄って組織する結社または同人組織のごときものと察せられる。今日の、世の中一般を意味する社会ではない。

明治七年・一八七四年 国民

(西周『駁旧相公議一題』明六雜誌、第三号)

今ソレ政府ヲ以テ国民コンタラツシヤール約束ヨリ成ル者トシテ之ヲ論ズ。

明治七年・一八七四年 世交

(森有礼『宗教』明六雜誌、第六号)

宗教ノ事ニ就テ人民自由ノ權ヲ有スルハ、唯ニ其不好ノ宗教ヲ崇奉セス、又官ノ強令ヲ奉セサルニ止ル、決シテ自恣公行以テ世交ノ妨害ヲ為スノ權ヲ有スルニ非ルナリ

宗教ノ世交ニ関スル至テ大ナリ
世交邦政ノ要ハ必然其邦ヲ安保スルニアリ

宗教ハ外顯ニ関スル事ノ外ハ決シテ政府ノ事ニ非ス、中心ノ宗教ハ各人自己ノ事務ナリ、世交ヲ妨ケ乱ルニ非レハ誰モ之ヲ制シ且罰スルコトヲ得可ラス

明治七年・一八七四年 会社

(中村正直『西学一斑』明六雜誌、第一六号)

各ソノ会社ヲ設ケ、公同ノ益ヲ謀ルヲ「ソサイテイ」トイフ。ユヘニ「ソーシアル・ヲアダア」ハ國中兵農工賈芸術会社等惣体鈞合ヨク次序鈞等ヲ得ルヲイフ。

(備考) 右の会社は、いわば職能団体のごときもので、兵士・農民・工業従事者・商賈・技術者等の集団をさしているようである。

明治七年・一八七四年 人間交際 交際

(福沢諭吉『学問のすゝめ』第九編)

人の性は群居を好み決して独歩孤立するを得ず。夫婦親子にては未だ此性情を満足せしむるに足らず、必ずしも広く他人に交り、其交愈広ければ一身の幸福愈大なるを覚ゆるものにて、即是れ人間交際の起る由縁なり。既に世間に居て其交際中の一人となれば、亦随て其義務なかる可らず。凡そ世に学問と云ひ工業と云ひ政治と云ひ法律と云ふも、皆人間交際のためにするものにて、人間の交際あらざれば何れも不要のものたる可し。

明治七十八年・一八七四—五年 社会

（森有礼編『日本教育策』訳者不詳）

一般教育ノ効ハ、能ク国民ヲシテ甚ダ益アルノ民トナラシム。以テ兵トナセバ則チ勇、以テ工トナセバ則チ精、力作労働勤メテ怠ラズ、能ク多福ヲ享ク。其及ス所又タ前人未ダ知ラザル事物ヲ発著シ、大ニ社会ノ進歩ヲ助クベシ。

（備考）本書は、森有礼が代理公使として米国に駐在中にみづから編さん出版した『日本の教育』

（Education in Japan : A series of Letters, addressed by prominent Americans to Arinori Mori. New York, 1873, NDL call no. 370. 952-M 854c.）の一部分をほん訳したもの。

.....

明治八年・一八七五年題言、明治十一年・一八七八年刊 社会

（久米邦武編『特命全権大使 米欧回覧実記』第十三巻、華盛頓府ノ記、下）

英国ノ属地タリシトキヨリ、已ニ此国ハ自主民ノ移住営業場トナリシヲ以テ……合衆聯邦ノ制ヲ以テ、一箇ノ民主国トナリ、州、郡、村、市、社会ノ間ニ、自主ノカヲ用フル自在ニテ、益歐洲人民ノ営業ヲ起ス地トナリシハ……

（備考）右の「社会」は、コミュニティあるいは集落等のごとき小さい共同社会をさしたものと察せられる。

明治八年・一八七五年 社会

（福地源一郎執筆『東京日日新聞』社説）

弁駁ノ論文ハ新聞紙上ニ多シト雖モ昨日（一月十三日）日新真事誌ニ登録シタル文運開明昌代ノ幸民安宅矯君が我新聞ニ記載シタル本月六日ノ論説ヲ批正セシ論ヨリ期望シタルハ無シ吾曹ハ其全局ノ主旨ト全文ノ遺辞トヲ以テ此安宅君ハ必ラズ完全ノ教育ヲ受ケ高上ナル社会ニ在ル君子タルヲトスルヲ得ルニ付キ吾曹が浅見寡識ヲ顧ミズ再ビ鄙意ヲ述ベテ謹ンデ其ノ教ヲ乞ハント欲ス（明治八年一月十四日、社説）

（備考）右に使われた「社会」が、おそらく、多くのひとに社会の訳字の初見とされてきたものであると思われるが、福地源一郎は、同年一月二日の社説のなかにおいても、今日の狭義の社会をさして「社」といつているのが分る。すなわち、「華族会館を始めとし明六社。有朋社。集成社。共存同衆等の名を下して社を結び西洋のソサイチー、クラブに類するもの東京中にて幾社あるを知らず」と述べている。

明治八年・一八七五年 社会 （森有礼『明六社第一回役員改選ニ付演説』明六雑誌、第三〇号）

昨冬来社会演説ノ法起テヨリ漸「ソサイチー」ノ体裁ヲ得ルニ至レリ、然レトモ未タ之ヲ聴クノ後就テ討論批評スルノ段ニ至ラス

（備考）右にみられる「社会演説」の語は、「一般社会に公開された演説」という意味に解せられるので、今日の用法とみてよさそうである。後の「ソサイチー」は学会の意と解せられる。

明治八年・一八七五年 仲間 交際（西村茂樹『文明開化ノ解』西語十二解、明六雑誌、第三六号）

右両学士ノ言ニ拠テ見レバ「シヴェリゼーション」ハ二条ノ路上ニ其形ヲ現ハス者ニテ、一ハ仲間ノ交際ノ上ニ現ハレ、一ハ一身ノ身持ノ上ニ現ハルハ者ナリ。猶委ク其義ヲ言ハバ、一ハ交際ノ品位段々進ミテ其全体尽ク安昌幸福ヲ受クルコト、二ハ人民各個ノ品位段々進ミテ、同ク安昌幸

福ヲ受クルコト是ナリ。

人民各個ノ身ト交際ノ全体ト並ンデ其品位ヲ進メザレバ「シヴェリゼーション」ト名クルコト能ハズ（明治八年四月十六日）

.....

明治八年・一八七五年 人間社交 相ヒ生養スルノ道 為群

（西周『人生三宝説』明六雑誌、第四〇号）

人間社交ノ生ニシテ、哲^{フィロソフィカル}理ノ眼目ヨリ観レハ政府未タ立タサルノ前ニ既ニ人間社交ノ生相ヒ生養スルノ道ハ備ハラサルヲ得シテ、人生ニ欠ク可ラサルノ急タレハナリ。……亜弗利加漠中ノ黑人ニテモ亜墨利加山中ノ赤種ニテモ漠北遊牧ノ民ニテモ蝦夷ニテモ台湾ノ島夷ニテモ、大小ノ差コソアレ、為群^{ソシアル}ノ性ニ因テ村落一部落ノ交通ハ鄙粗言フニ足ラサルモ必ス無キ能ハサルナリ。

明治八年・一八七五年 世間

（藤田茂吉『政令法律ノ目的ヲ論ズ』民間雑誌、第七編）

其政府ノ職トシテ政令ヲ施シ、法律ヲ定立スル所以ノ目的ハ、唯二物ヲ得ント欲スレバナリ。二物トハ何ゾ。「ハピネス・オフ・インデビジュアル」^{幸福}各人「ピース・オフ・ソサイチイ」^{世間}安全ノ是レナリ。

明治九年・一八七六年 社会

（福沢諭吉『学問のすゝめ』十六編）

一方より見れば社会ノ人事ハ悉皆虚を以て成るものに非ず

明治九年・一八七六年 社会

（井上敬二郎編『近事評論』第二号）

然リト雖トモ、人如シ我輩ヲ難シテ、琉球難民ノ為メ、既ニ我兄弟ノ貴重ナル生命ヲ蛮煙瘴霧ノ中ニ埋没シ、我社会ノ緊要ナル貨財ヲ、狂爛怒濤ノ間ニ消耗シタリ……（琉球藩ノ紛議）

明治九年・一八七六年 社会

（永峰秀樹訳『ギゾー欧羅巴文明史』卷七）

欧洲封建ノ諸大國中ニ存在セル自由市邑ノ起原及ヒ其人民ノ結ンテ一体ノ社会トナリタル時代及ヒ其免許状ノ性質等ヲ略論セリ氏ノ説ニ因レハ此社会ヲ構成セルハ西班牙国ヲ以テ最初トス

明治九年・一八七六年 社会

（轟信次郎『凌轢論』草莽雑誌、第四号）

今ヤ我日本ノ情勢ヲ熟視スルニ上等社会ノ紳士ニシテ天下ノ名望ヲ繋ケル君子ト雖トモ大約官途ノ一編ニ着意シテ争テ青雲ノ志ヲ官員市場ニ向ッテ満足セント要シ……

明治九年・一八七六年 社会

（『家庭叢談』）

必ず日本社会に於て選り抜きの士なる可し（第一四号）

今暫ク大空社会ノ話を止め、我々の人間社会ノ事柄も等しく釣合を保たずしては順序の立たぬものなり。（第一五号）

明治九年・一八七六年 社会

（中島勝義『俗夢驚談』）

政府ナリ官吏ナリ農夫ナリ商人ナリ……何ナリ漢ナリ、其位階ノ高下ヲ論ゼズ其俸給ノ多少ヲ問ハズ、苟モ毒ヲ社会ニ流シテ同胞ノ幸福ヲ妨害シ害ヲ世上ニ及ボシテ兄弟ノ安寧ヲ障碍シ斯良民ノ自由権理ヲ犯スガ如キアラバ……

明治九年・一八七六年 社会

（『暗殺論』草莽雑誌、第六号）

抑モ論者ノ顛覆義死ヲ論破セル所以ハ義死ハ社会上ヲ利益スルノ効ニ乏ク顛覆ハ社会上ニ波及スル弊害ノ多キヲ以テニ非スヤ

明治九年・一八七六年 社会

（『九月五日從二位大原重徳謹シテ書ヲ岩倉公閣下ニ献ス』会館雑誌、第五号）

夫西洋諸国總ヘテ社会ヲ以テ事ヲ為ス故ニ百足ノ虫死ニ抵テ僵レサルカ如ク甲敗ル、モ乙救ヒ終ニ瓦解ニ至ルモノ鮮シ

明治九年・一八七六年 邦国（木庭繁『シビルリベルチー、仏国憲法中抄訳』草莽雑誌、第一号）

第二十三条 邦国ノ保全ハ各人ヲシテ其権義ヲ受用スルコトヲ得セシムル衆民ノ活潑力ト衆民ノ国權ヲ掌握スルトニ在ルナリ

明治十年・一八七七年 社会

（福沢諭吉『分権論』明治九年識語、明治十年刊）

苟も武家の名あれば軍役あらざるものなし。軍役とは何ぞや。政治上に事を生じて君家の安危に関し兼て社会の利害に差響くの場合に至れば、戦場に向て死生を決することなり。

斯る教育を以て養成したる此士族の働は、即ち我日本社会中に存在して其運動を支配する一種の力なれば、仮令ひ一旦の事変に逢ふも頓に之を消滅し尽す可きものに非ず。

嘉永の末年に外交を開きしは我国開闢以来の一大事変なり。社会の事に変あれば社会の力も亦其形を変ぜざるを得ず。

（備考）福沢の著作物においては、「社会」の語は、明治九年のものに初出するが、十年以降になると、急に頻出するようになる。

明治十年・一八七七年 社会

（平井正訳『英国政典』）

夫一国ノ憲法ナルモノハ、其国民ヲ管理スル所ノ法律ノ全体及ヒ此等ノ法律ヲ設立実施スル所ノ機器ヲ通称スルモノナリ、凡ソ最小ナル人民社会中ニハ、更ニ憲法政府ノ如キモノアルコトナシト雖モ、毎員社会ニ処スルニ、彼ノ僱曹他人ニ対シテ行為スルコト、他人僱曹ニ対シテ行為スル如クアレト云フ金言ヲ常ニ遵守セバ、亦憲法政府モ之ヲ需ムルニ足ラス、将タ法律ノ保護ナキヲ憂フルニ足ラムヤ

故ニ社会ナルモノハ、其弥大ナルニ臻レハ、社員各自ノ間ニ生スル所ノ紛紜ハ、從テ繁雜ヲ極ム、是則チ此紛擾ヲ預防スルカ為ニ、適當ナル法律ノ設ケナカル可カラサル所以ナリ

地方省長ハ往時^{フアーロー・ゴツルド}賑恤法省ノ長ナリ、該官ハ必スシモ内閣ニ列セズト雖トモ其職務ハ歳々重大ナルニ迫ヘリ専務ハ地方ノ社会健康ニ関スル事務ヲ總轄スルニアリ

（備考）「社会」は public の訳にもあてられている。

明治十年・一八七七年 社会 民 人民社会

（服部徳訳『民約論』）

此書ノ原名ハ「コントラ、ソシアル」ト題ス故ニ今之レヲ民約論ト訳セリ蓋シ其論旨ハ専ラ人民社会ノ原理ヲ説明シタルモノニシテ意味頗ル深重ナリ

天下凡百ノ社会中ニツキ其最モ太古ニ溯リ特リ天然ニ源由スルモノハ則チ一家ノ社会ナリ蓋シ此社会ニハ父子ノ間ニ於テ天然ノ慈愛ノ情アリテ自ラ之ヲ交結セリ然レトモ只其子ノ幼稚ニシテ其父ノ鞠養ヲ要スルノ間ニ止マルノミ

明治十年・一八七七年 社会 人民社会

（『情況証拠法ヲ論ズ』講学余談、第一号）

英国ノ法律ハ其使用ニ由テ之ヲ二種ニ区分スベシ。即チ一ヲ幹法ト謂ヒ、一ヲ支法ト謂フ……然ルニ幹法ノ成ルハ支法ヨリ先ナルコトハ、特ニ英国ノミナラズ、文明諸国ニ於テ皆同轍ナリ。蓋シ一社会成立シテ君アリ民アルニ至リテハ、必ズ各人ノ權利ヲ確定シ、其財産ヲ保護スベキ規則ヲ制定シ、以テ之ヲ理治セザルヲ得ズ。而シテ此規則ナルモノハ則チ法律中ノ幹法ナリ。故ニ幹法ハ人民社会ト同時ニ成立スルモノト謂フモ可ナリ。

明治十年・一八七七年 社会 世態 (井上操『ボワソナード性法講義』明治七年筆記、明治十年刊)
日本ト西洋ト問ハス苟モ社会ニ生活スル上ハ吾人共ニ吾人ノ權利ト吾人ノ職分トハ互ニ深キ関係アルコトハ之ヲ知レリ

法ヲ制定スルニ付テハ立法官ハ真理「レゾン・ビュール」ニ適シ至正「デウス・チース・アプソリュテ」ヲ得タル規則ヲ求メ而シテ人民ノ需要ト其ノ願望ニ依テ之ヲ斟酌シ又タ教化 世態及ヒ經濟ノ模様ヲ考ヘテ之ヲ折中シ而シテ人民相互ノ權利ト職分上ニ付テ明瞭ノ規則ヲ制定シ万民ヲシテ其因リ行フヘキ法則タルヲ知ラシメ而シテ外部ノ制裁ヲ命スルヲ設ケ以テ万民ヲシテ此ノ法則ヲ遵守セシム且ツ裁判官ニ許ルスニ明記シテ限界ノアル權カヲ以テシ而シテ社会ト人民ヲ護衛セシム

明治十年・一八七七年 社会 (『専売免許法ヲ論ズ』講学余談、第三号)
専売免許ノ法ハ……開化漸ク進ミ人智漸ク開ケ、人々競フテ利器要具ヲ發明シ、或ハ從來ノ器具ヲ改良シ、以テ社会ノ幸福ヲ増殖セントスルニ至リテハ、殆ド欠クベカラザルノ要法ナリ。

有益ナル發明改良ニ由テ大ニ全社会ノ幸福ヲ増殖スルガ故ニ……

明治十年・一八七七年 社 (高橋達郎訳『米國法律原論』司法省刊)
凡ソ各人ノ互ニ其財産ヲ殊別シテ特自ニ之カ權利ヲ得ルノ欠キ難キ事情ハ蓋シ人ノ初メテ社ヲ成シ互ニ交際ヲ通セシ時ヨリ早ニ發生シ次テ一國ノ芸術、開化愈々進歩スルニ從ヒ又愈々其切要ノ度ヲ増加セシコト必然タル可シ

明治十一年・一八七八年 社交 社会 会社 (深間内基訳『ミル男女同權論』)
夫レ此書ヲ著シタル所以ハ、余ガ夙トニ社交ノ利害及ヒ政 國ノ得失ニ關シテ意見アリシ時ヨリ、固守シタル説ヲ弁明セント欲スルニ在リ

人智蒙昧タル未開ノ社会

昔日ハ婦人ノミナラス男子ト雖モ亦奴隸タル者社会ノ大手ヲ填メ……

文明ノ会社

明治十一年・一八七八年 交際 (小林儀秀纂訳『政体論』文部省刊)
政府ニ於テ人民ノ意ヲ統管スル權アレハ又從ヒテ他人ヲシテ之ヲ管轄セサラシムル權無クンハアル可カラス之カ為メニ政府ニ於テ人民ノ交際ニ間然スル權アルヘシ

明治十一年・一八七八年 社会 (近藤真琴『新未來記』)
凡テ人間ハ互ニ輔け合ふものなれば。われ一人ノ自由を捨て社会の爲めにする時は。遂に己れに立もどる。

……………

明治十一年・一八七八年 社会 (永田健介訳『人口救窮及保険』文部省刊行百科全書第十)
隣人ノ衣食ヲ資スルノ窮民アリ此ノ如キ人類ノ世ニ多キモノ人性ノ自カラ然ルノミニアラス人類
社会ニ在リテハ亦遁ルヘカラサルノ天命ト謂フヘシ

明治十一年・一八七八年 社会 (山崎直胤訳『仏国政法提要』)
凡ソ一国社会ノ其社員タル人民ニ向テ、為スベキ義務タル一切ノ事務ヲ逐一中央政府ニテ執行セ
ス、其一部ヲ地方ニ分仕セシト雖トモ……

明治十一年・一八七八年 社会 交際 (塚本周造訳『論理学』文部省刊)
交際学は人間社会の理を講ずるの学にして其論ずる所の発象多端にして前に位する五大学科の理
悉く存せざる無ければ則之を末位に置けり夫れ交際の感情は機無体有機体の性質と万物の靈たる人
心の性質とに基きて成る而して人及び社会の生命皆是の学科に論ずる所の理を離るゝ能はず

明治十二年・一八七九年 会 結社 仲間 組合 社中
(中村正直校・津田仙等編『英華和訳字典』)

明治十二年・一八七九年 交社 社会 (渡辺恒吉訳『英国議院論』)
吾輩ハ人類ヲ交社ノ員ト認メ其相互ノ間各種ノ関係ヲ有スル権義ニ就テ論スル有ラントス

人ノ最も愛好ス可キ行ヲ為シ總社会ヲ煩ハサズシテ能ク公益ヲ務メタル特秀ノ人ヲ賞スル為二位
階ト榮爵トヲ崇尊スルハ制度ノ具ハリタル各国政府ニ於テ緊要トスル所ナリ

明治十二年・一八七九年 社会 (福本巴『普通民権論』)
人民相集リテ組立タル社会ニハ、必ラズ之ヲ保護スル政府ナキハナシ。

明治十二年・一八七九年 社会 交際 (西村茂樹講演『大学ノ中ニ聖学ノ一科ヲ設クベキ説』)
聖学ノ名ハ西国ノ学科ニ無キ所ニシテ…本体ト為ル者ハ支那ノ儒学ト西国ノ哲学トヲ合セタル者
ニシテ、耶蘇教、仏教、回教ヲ以テ其付属ト為ス、其科目ハ修身、性理、政事、理財、交際（即チ
社会学）ノ五目ニシテ、修身、性理ヲ以テ他ノ三目ノ基礎ト為ス

明治十二年・一八七九年 社会 (植木枝盛『民権自由論』)
ルソーと云ふ人の説に、人の生るや自由なりとありて、人は自由の動物と申すべきものであり
ます。されば人民の自由は縦令社会の法律を以て之を全うし得るとは申せ、本と天の賜にて人たる
ものの必ずなくてはならぬものでござらう。

明治十三年・一八八〇年 社会 (尺振八訳『斯氏教育論』文部省刊)
夫レ元来社会ハ、各個人ニテ組成セシモノナリ。故ニ社会上ニ生ズル各事ハ、皆各個人ノ所為ノ
集合セシモノニ外ナラズ。

明治十四年・一八八一年 社会 (Society) (井上哲次郎等『哲学字彙』東京大学三学部刊)

明治十四年・一八八一年 社会 (中江篤介『干涉教育』東洋自由新聞、第六号)
凡そ人の窮困飢餓をみて之を救恤するは是れ社会の義務なる而已

明治十四年・一八八一年 社会 (秋山恒太郎訳『接物論』文部省刊百科全書)
概スルニ人間各某社会即チ其盟社中ノ一社員タラザルモノナシ

明治十六年・一八八三年 社会 (有賀長雄『社会進化論』)
社会学とは人間社会の現象を解釈するの理学なり。

明治十六年・一八八三年 社会 (陸奥宗光訳『利学正宗』)
抑モ社会トハ無象的ノ一〇〇体ニシテ実ハソレヲ組織セシ物素ノ如ク見ユル所ノ各自個々ノ員数ヲ概
括シタル総称ニ過キサルナリ

明治十七年・一八八四年 社会 社 会 仲間 組合 会友 (society) (尺振八『明治英和辞典』)

明治十九年・一八八六年 社会 (石川彝訳『大英律』)
太古以来天然ト民為トヲ問ハス、社会ナル者未タアラサルノ時アリトハ、如何ナル理論アリトモ、
吾人ノ信スルコト能ハサル所ナリ……
社会ハ其各員ノ権利ヲ防護ス可ク、各個人ハ (此ノ保護ノ報酬トシテ) 社会ノ法律ニ従フ可キナ
リ

以上みてきたところをまとめてみると、「社会」ということばの初出は、わが国では文政九年（一八二六年）であったが、それは今日使われているような意味内容をもたえたものではなかった。今日使われるような意味での「社会」の誕生は遅くとも明治八年（一八七五年）であるが、それが一般に普及しはじめたのは、明治十年（一八七七年）ごろからであったらしい。しかし、「社会」の語が普及しはじめたのちも、なお、他の多くの類語が使われ、なかなか統一に至らなかった。

——ここまでが斎藤毅『明治のことば一東から西への架け橋』、第五章 社会という語の成立、
五 社会ということばと観念が定着するまでのその類語、からの引用である。

——以上、あるいは、一項目の補注としては過多過剰の咎を犯すくらいの引用をおこなったかも知れないかとは思ふ。もし、そうだとしたら、お詫びするしか仕方無いとは思ふ。しかし、“若き牧口常三郎、が『人生地理学』を書き進めていた一九〇三年（明治三十六年）ごろの日本思想界の（特に、誕生・成立の日なお浅き日本社会学界の）置かれていた客観条件を（特に、比較教育文化史的状况を）できるだけ正確かつ緻密に知っておく必要があった。『人生地理学』の第三篇全篇は、先入主なしに観察し直した場合、始めから終わりまで『社会学的思考方式』によって貫かれていることがあまりにもはつきりしているから。

2 「社会主義」と云ひ（一九三ページ、注3） こんにちではいかなる小型＝携帯用の国語辞典であっても必ず「社会主義」の名辞（＝見出し語）を登載しているが、明治時代の小型の国語辞典にあっては斯様な見出し語は載せられていなかった。実例を挙げて説明しよう。久松潜一監修／山田俊雄・築島裕編『新潮国語辞典』（一九六五年十一月刊）の「シャカイ【社会】」という見出し語（＝項目）をひくと、その複合語として「——シュギ【一主義】(socialism) 資本主義に反対して、生産手段・分配手段の社会的所有とその民主的運営を根幹とする、政治・経

済上の理論と運動。」との語釈（＝定義）が示されてある。ところが、一八八四年（明治十七年）十二月成稿の^{ドイツ}日付を有する大槻文彦著『言海』（一九〇四年二月、吉川弘文館刊）をひらくと、「しや-くわい（名）**社会**（一）同ジ趣キノ人人。同流ノ仲間。（二）一国一州ナド、相頼リテ生活スルー^{ヒトムレ}団ノ人民ヲ称スル語。」という見出し語およびその語釈が載っているけれど、「社会主義」という見出し語のほうは全く掲げられていない。按ずるに、「社会」の術語＝概念が^{かろ}辛うじて市民文化レヴェルで一般化（＝公的認知を得たの義である）の機会に恵まれたばかりで、ほやほやの新語として未だ珍しがられていた明治前期中期の段階にあっては、況してや「社会主義」などという^{うきんぐさ}胡散臭い（あるいは、むしろ、危険思想視されていたと表現すべきか）輸入語が書生向き小型国語辞典に採用掲載されるまでに到っていなかったとしても、それは、むしろ当然の成り行きだったのではあるまいか。そして、そのような言論状況下において、なおかつ、牧口常三郎『人生地理学』の此処の個処に「社会主義」の術語（＝学問概念）が正々堂々と（あるいは、むしろ、怯む^{ひる}気配も見せず、^{けはい}図太くも、と表現すべきか）提示されてある客観的事実の「重たさ、と「鋭さ、とを、読者諸賢が見落としたり過小評価したりなさぬよう、^{あま}敢て繰り返し御注意を喚起しておきたいとおもう。当時において、未だ国民の大半は「社会」と「社会主義」との区別さえ付かない蒙昧なる段階に停滞したままにいるというのに、わが「若き牧口」は両者の弁別をなし得る少数インテリの群のほうに入っていたばかりでなく（それだけでも、当該段階では偉すべきであるが）、すでにして「社会主義」の内包する長所・短所を^{あま}剩すなく理解し^{おぼ}畢せていたのであるから、じつに驚かされる。いずれ本補注のどこかで言及しなければならぬ事柄ではあるけれど、牧口常三郎がその思想家の生涯をつうじてつねに一方で「社会主義」的政治経済諸政策の立案＝実践の必要を主張しつつ^{しか}而もマルクス＝レーニン主義のそれとは明確に異なる一線を^{かく}画しつつけていたこと、つねに一方で「社会主義」的諸経済理論を支持しつつ^{しか}而も自由主義経済倫理パラダイムと両立せしめる必要を強調していたこと（これは、^{あま}敢て付言せねばならぬが、無原則に自由民主党タカ派と社会党左派とが狙れ合って連立政権をでっち上げるごとき一九九四～五年権力所在条件とは根本的に相容れない倫理的＝哲学的決断の問題である）、こういった重要テーマを理解するためには、どうしても『人生地理学』で使用された学問上の術語 technical terms（＝概念 concept；conception）をひとつひとつ解説してゆく努力を費やさなければならない。明らかに幸徳秋水や堺利彦の^{まぢか}間近にいたはずであるのに^{しか}而も所謂「主義者」の仲間入りをせず、そのあと、国定教科書編纂にさいしてその^{うらた}裏方的作業に加わり文部省属（下級の職務ではあるけれど広義の文部官僚の一員に擬して誤りないであろう）の地位に在りながら決して権力的思考に同調せず、さらには有名小学校の校長という一定の尊敬を集める公務員の^{ボジション}地位（いまでも、小学校々長や中学校々長・高等学校々長ぐらい勲章を欲しがめる人種は他に類を見ないことは、年ごとのあの叙勲発表の新聞記事に接すれば容易に推量し得るが）に在りながら決して一身の安住を^{はか}図って有力政治家に媚びを売ったりせず、終始一貫して、民衆のがわに立って真実を探究しつづけ幸福を追求しつづけた牧口常三郎の《思想家像》を正しく描出彫刻するためには、どうしても『人生地理学』の中にその《原型》das Urbildの所在を^{たしか}検めておかなければならない。そして、

その仕事を遂行することは、われわれにとって義務でさえある。

そのことはさて置き、当面の研究対象に戻って補注をおこなうとすると、まず、一九〇三年（明治三十六年）当時に「社会主義」が世間（＝明治中期思想文化界）からどのような印象で見られ且つ扱われていたか、ということをはつきりさせておかなければならない。本章補注（１）（２）（４）（８）は、いずれもこの問題と深い関わりを持っているから、それらをも併せ参照願うことにして、この場所では、特に岸本能武太『社会学』（一九〇〇年十一月、大日本図書株式会社刊）に拠って、同書序論部分（原著では「総論」と題し、第一節社会学の字義／第二節社会学は新しき学問なり／第三節社会学の誕生は何故に斯く遅かりしや／第四節社会現象研究の三方面／第五節社会学は甚だ複雑なる学問なり／第六節社会学の定義／第七節社会学と社会的諸科学との関係／第八節社会主義と社会学とを混同すべからず／第九節社会学研究の利益、の九つのセクションに分かれて、謂わば《社会学理論形成史》がかなり詳細に記述されている）のなかで論及された「Socialism 概念と Sociology 概念との間の明確な差異 difference」をはつきりさせておく処置を選びおく。岸本能武太の名は、一八九八年（明治三十一年）十月十八日に発足した「社会主義研究会」の会員（＝発起人）のメンバー（高木正義、河上清、豊崎善之介、岸本能武太、新原俊秀、片山潜、佐治実然、神田佐一郎、村井知至、幸徳秋水、金子喜一、中村太八郎、安部磯雄ら）のなかに見出され、同会第三回公開演説会（一八九九年一月十五日）に「サン・シモンの社会主義」の弁士として熱弁を振るったことでも有名である。この社会主義研究会は、二年後（一九〇〇年一月）に「社会主義協会」と改称して実践的立場をとり、やがて「社会民主党」の結成をめざすことになるが（一九〇一年五月、即日禁止の弾圧措置を蒙る）、岸本能武太は、終始、安部磯雄、村井知至らアメリカ留学組（かれらは、一様に、神学研究のためアメリカへ渡ったのだが、次第に社会問題・社会主義・社会学へ接近＝接触し、ついにキリスト教社会主義者としての立場を鮮明にしてゆく）と行動を共にしていた。秋元律郎『日本社会学史—形成過程と思想構造—』（一九七九年五月、早稲田大学出版部刊）は、安部・村井・岸本らによって「キリスト教社会主義と交錯しながら、初期の明治社会主義の中心をかたちづくっていくことになる」プロセスを明らかにしたあと、そのような傾向をもつ一方で、上述のごとくキリスト教社会主義者にして同時に社会学者でもあったかれらアメリカ留学グループを際立たせているものに「政治運動と学問的立場との峻別」の厳正さという特徴がある、との指摘をおこなってみせている。「もちろんかれらを社会主義にむかわせていった契機が社会問題にあり、またそれへの媒体として社会学があったにせよ、かれらのうちで社会主義と社会学が理論的に混同されていたわけではない。この点では、安部にしても岸本にしても、繰り返し注意を喚起しているし、またかれらじしんそのための理論の整備を怠ったことはなかった。」（第三章社会問題の発生と明治社会主義、三 社会学と都市社会主義）と。

これだけの予備知識を再確認したあとで、さて、いよいよ、前掲岸本『社会学』総論第八節社会主義と社会学とを混同すべからず、のCHAPTERを御検討ありたいとおもう。なお、序でに、岸本が「社会主義」と峻別してみせた「社会学」ないし「社会学研究」の概念内容をも知ってお

きたくおもう。牧口『人生地理学』第三篇の記述が何故に斯く社会学的思考を踏まえていたか、という問いに対する、なにがしかの答えになり得るかも知れぬ、と推臆されるからである。

第八節 Socialism と Sociology とを混同すべからず

ソーシャリズム（社会主義若しくは共產主義の意）とソシオロジイ（社会学）とは其の呼び声の相似たるより、或は兩者を取り違へて同一物の如くに思惟する者無しとも云ふべからず。故に今左に少しくソーシャリズムの性質を略論して、其のソシオロジイと異なる所以を明瞭ならしめんとす。

抑も「ソーシャリズム」なる名称は、千八百三十五年英国に於てロバート、オーエン（Robert Owen）なるものが Association of All Classes of All Nations と称する一大協会を組織し、社会改良否社会改造を企図せしに始まるものにして、其後仏国人の手を経て遂に欧州諸国到る處此名詞を用ゐざるは無きに至れり。而して此の「ソーシャリズム」なる名詞は之を我国語に訳すれば、或は社会主義と云ひ或は共產主義と云ふを得べし。而して今日の処社会主義は未だ一定したりと云ふべからず、名は同一なるも実は之を主張する人々次第にて甚だ相異れり。たとへばラサールの社会主義と云ひ、カール、マルクスの社会主義と云ふが如く、殆んど十人十色の実あり。然れども今日に於て多数の社会主義者が漸く一致し来りつゝある所は見るに難からず。故に少しく大体に就いて之を云はん。

欧州の社会に於ては頻年貧富の懸隔漸く甚だしくなり来りて、貧しき者は愈々貧しく、富む者は益々富むの傾向あり。資本家は飽食暖衣の中に、土地資本等の財産を独占して便利快楽の程度を増進するの傾向あり。之に反して労働者は酷熱嚴寒の差別なく、終年終日骨を折り汗を流して労働すれども、給料豊かならざるが故に、財産を蓄積して不時の変に備へ得ざるは云ふ迄も無く、自ら労働して富を生産しながら正当に富の幸福を楽しむこと能はず。其地位愈々墮落して遂には労働と貧苦との間に空死せんとするの傾向あり。是に於て乎社界改良の声は起り来れり、社会改造の必要は生じ来れり。今ソーシャリスト（ソーシャリズムを主張する者即ち社会主義者）が此の貧富の懸隔と其救済策とに関して論ずる所を聞くに、其要略は左の如し。曰く、

『斯く貧富の懸隔漸く甚だしきを来す所以のものは、帰する處現今の社会組織に不都合あればなり。故に現今の社会は之を改良、否、改造せざるべからず。即ち現今の社会組織は、凡ての富の源泉にして又凡ての文化の基礎なる土地と資本との独占私有を許容するものなるが故に、斯る不都合は生じ来たれるなり。宜しく此の二者の独占権を全廃し、此の二者をば社会全体の共有財産となし、以て社会を組織する凡ての個人をして此等の共有財産より生じ来る凡ての利益と快楽とを公平一様に享受せしむべし。斯くして始めて凡ての人々は此恩沢を蒙るに於て過不及の差別あらざるべく、貧富の懸隔を来たすの憂之あらざるべし』

と結論して、私有財産を廃し凡ての財産を社会財産即ち共有財産即ち共産と為さんとす。是れソーシャリズムを訳して社会主義若しくは共產主義と称する所以なり。

ソーシャリズムの起原と其性質とは略ぼ右に陳ずるが如し。斯くの如くなればソーシャリズム即ち社会主義とソシオロジイ即ち社会学との區別は、自ら明瞭なるべしと思はる。先づ第一に、ソシオロジイは社会に関係すると云ふ一点に於ては、ソーシャリズムと相似たりとするも、前者は直接には理論として之に関係するのみ。即ちソシオロジイは『社会に関する学問』たるに過ぎず。之に反してソーシャリズムは社会の改良及び改造に従事する實際運動にして、決して單に学理にはあらざるなり。第二に、ソーシャリズムは其の目的とする處富の公平なる分配、貧富の懸隔の撲滅、且つ労働者の救済及び保護に在り。されば社会全体の円満具足せる幸福の研究を目的とするソシオロジイとは、自ら相同じき所あり、又相同じからざる所あり。社会の幸福を目的とする所は兩者共に相同じきが如くなれども、一は独占事業の否定により貧富の懸隔を撲滅し以て此目的を遂げんことを計り、他は社会全体の性質目的等を研究して自然に斯る弊害の救済に及ぶなり。第三に、ソーシャリズムの抱負、性質、価値等の研究は云はゞソシオロジイの一局部を形造るなり。前にも云へるが如く、社会学は常に社会の過去と現在とのみを研究するものには非ず、社会の将来をも併せて研究するものなり。常に社会進化の歴史を研究するの

みに非ず、社会の目的は如何、又如何にせば吾人の尽力は能く社会の進化を助けて速に社会の目的を成就せしめ得るやをも研究するものなり。左れば社会主義即ち共產主義に関する研究批評は、自ら社会学の中に含有せられつゝあるを知り得べけん。

斯く見来れば社会主義即ち共產主義が社会学と同一物にあらざることは自ら明かなるべし。社会学は常に社会主義と同一物にあらざるのみならず、社会学は決して他の如何なる社会改良手段の別名にもあらず、又凡ての社会改良手段の総名にもあらざるなり。

第九節 社会学研究の利益

社会学研究の利益に就いては、社会学の性質に関し以上開陳したる処によりて自ら之を知り得べしとは思惟すれども、今此の総論を終結するに当りて、聊か此の研究の利益を揚言し置かんと欲す。

社会学の研究より生ずる利益は種々雑多にして、一々枚挙に遑あらざるは勿論の事なるべけれども、此等夥多の利益の中にて尤も大切なる利益、即ち利益の利益とも称すべきは、社会学研究の結果として、吾人は常に能く眼を社会の全局に配り得るに至るべく、従つて学説に於ても又行為に於ても凡て何事によらず能く偏僻の過失を免かれ得ること、即ち是れなり。

吾人の最も陥り易きは偏僻の過失なり。如何に有限なる人心の常とは云へ、偏僻程人々の陥り易き過失は少かるべく、又偏僻程社会に損害を及ぼすものは少かるべし。是れ蓋し吾人の限界狹隘にして事物の全局を洞観すること能はざるに因るなるべし。今社会学は人間社会全体に關係する學問にして、社会の凡ての現象をば一も漏すこと無く、凡て之を網羅し、之を分類し、彼此の間の關係を探り、自他の間の秩序を究め、以て一見錯雜なるが如き社会をして整然たる一有機体たるの実相を呈出せしむるものなり。凡ての制度即ち社会を組織する凡ての要素の性質變遷等を個々別々に研究するに止まらず、進んで此等要素の相互の交渉如何を研究し、又進んで此等要素の綜合的趨勢を研究するものなり。即ち先づ此等要素の趨勢を帰納的に研究して以て社会全体即ち社会其者の目的を發見し置き、次きに社会の凡ての要素をば如何にして最も速かに此の社会全体の目的に向つて進捗せしむべきやを研究するものなり。故に吾人にして若し社会学の何物たるを了解し其精神に感化せられなば、吾人は何事を為すに當りても必ず先づ事物の四方八方を眺めて其關係如何を探り、全局の動靜を察して後に或は己れの學説を立て或は己れの行為を始むるに至るべく、従つて粗忽偏僻の過失に陥るを免れ得べし。之を喩ふれば恰も囲碁を學ぶが如けん。たとへば社会学でふ定石を知らざる間は、吾人は社会でふ碁盤に向ひ石を下すに當りても、僅かに一局部の動靜を見得るのみにして、此の局部と他の局部との關係を洞観することを知らざれば、前後左右を見合せて打つと云ふこと能はざるべし。社会学を知るは恰も定石を覚ゆるが如し。一度定石を覚え得て後は、一石を下すに當り全局は常に明かに眼前に横はるが故に、偏僻の爲めに己れの石を殺し、辛苦を以て水泡を買ふが如きことあらざるべし。

今社会学研究の利益、即ち偏僻を避け得る利益を學術研究上と社会革新上との兩方面より考へ見んとす。

第一、學術研究に対する社会学研究の利益——科学専門家の最も陥り易き弊害は、己れが專攻する科学を凡て他の科学に優りて面白く又肝要なりと思惟し、従つて凡て此等の科学を、言語に於てにあらずんば事實に於て、輕蔑するの傾向あることなり。見よ形而下学者と形而上学者とは互に相反目するの傾向あるにあらずや。又形而下の諸科学者の間に於ても、或は形而上の諸科学者の間に於ても、各自互に軋轢するが如き傾向あるにあらずや。見よ唯物論者と唯心論者の爭論を。見よ心理学者と哲学者との牴牾を。見よ哲学者と宗教学者との不和を。見よ宗教学者と物理学者との喧嘩を。見よ物理学者と生物学者との弁難を。歸する處皆是れ我田引水より起れる靜闇にあらずして何ぞや。一局部に偏して全局面を忘るゝより生じ來れる衝突にあらずして何ぞや。此等凡ての科学をして各々其地位に安んぜしめ其任務を全ふせしめて、而も相互の關係をして円滑親密ならしむるは、是れ正さに社会学研究の功德なり。見よ社会学の証明によりて、吾人は始めて今日迄人々が棄てゝ顧みざりし事柄にも、之を研究するの価値あることを悟り得るに至れるにあらずや。たとへば吾人の間に存ずる古き神話言伝の研究の如き、又野蠻蒙昧なる人種の性質思想の研究の如し。是れ皆人類進化の事實を研究するに於て必要欠くべからざればなり。是に於て吾人は云はんとす、社会学は凡ての真理は神聖なることを証明するものなりと。

第二、社会革新に対する社会学研究の利益——社会は革新せられて進歩を速かにするものなれば、何れの国又何れの代にも革新者を要せざるは無し。或は政治上の革新者を要し、或は教育上の革新者を要し、或は道德上の革新者を要し、又或は宗教上の革新者を要す。只此等諸種の革新者の最も陥り易き通弊は、彼等の眼界狭きが為めに、革新すべき事柄が他の事柄に及ぼす影響の利害如何を看破すること能はず、又彼等の眼力弱くして、其の革新が将来に來たすべき結果の善悪如何を予測すること能はず。之が為に非常なる害毒を社会に及ぼすか、或はそれ迄に至らざるも、折角の革新事業をして十分の功績を呈すること能はざらむること往々之あり。既往は追ふべからず。只将来の革新者たるべきものは宜しく此等の点に注意せざるべからず。たとへば将来の政治的革新者たらんものは、決して一時の利益に眩惑して百年千年の大計を過つが如き改革を為すべからず。又之が為に教育宗教其他の事業が永久に損害を蒙るが如き恐れあらば、如何に政治の為に便益なるにもせよ、此種の革新は断然之を放擲するの覚悟なかるべからず。而して此の見識と勇氣とは何処に於て之を求め得べきや。社会全体の現象を総合的に研究し、又過去現在将来を一貫する社会進化の原則を究究する社会学は、正さに此の場合に於て全局の智識と将来の予測とに關し必要な扶助を与ふるものにして、是れ社会革新事業に対する社会学の利益に外ならざるなり。

岸本能武太前掲文章が主張＝説得したかった主題は、要約すれば、こういうことになるうか。すなわち、富裕な資本家たちが飽食暖衣の限りを尽くし便利快楽の極みを尽くしている社会現実の存在する一方に、貧しい労働者たちは終年終日骨を折り汗を流して働きつづけて^{しか}而も正当に富の幸福を得られず困窮のうちに空死せざるを得ない社会現実が明らかに存在している、それゆえ、この不公平や矛盾を解決＝救済すべく「社会改良」をめざして「社会主義」運動が生じたのはまことに理路であり、自分もひとりの人間ひとりの信仰者として「社会主義」の實際運動を推進してやまないのだが、ただし、ひとりの学究ひとりの知識人という立場に戻って考えるとき、げんに自分が研究＝追究している「社会学」の理論はあくまで学問＝学理にとどまるほかないのである、結局のところ「sociology は社会に関する学問たるに過ぎず」という言いかたしか出来ないが、そう言ったからといって sociology が socialism の^{かざしも}風下に立たされるのではない。あべこべに「ソーシャリズムの抱負、性質、価値等の研究は云はゞソシオロジーの一局部を形造る」のである、なぜならば社会学はあらゆる学問＝学説に不可避の偏僻（一九八〇年代九〇年代のマスコミ関係者が^{ギャグしき}輕口式に濫用する「独断と偏見」という用語に^{ほぼ}略近いけれど、岸本の場合はもっと学問的な意味で‘bias’の訳語に当てていることに注意せよ）を取り除いてくれるし、さらに学者が陥りがちな唯我独尊の思い上がり心理や退嬰保守気分を修正し真義での社会革新事業に寄与することが出来るからである、と。——斯くのごとく要約し得る岸本『社会学』の理論的姿勢（目下の論題に即していえば、「社会主義」に向かい合う場合の「社会学」の位置関係というふうに^{パラフレーズ}言い替えしておいて差し支えないが）は、そのまま、牧口『人生地理学』における《社会学^{ヴァーサス}vs. 社会主義》の思想的対処方式を描出してみせている、と見做すことも可能であろう。なんにしても、“若き牧口、が岸本社会学理論に^{しんじつ}親昵し且つ精通するに到った精神形成史^{かるがる}を軽々しく見てはならないとおもう。

さて、以上の重大事実^{たしか}を検め得たあとの、本補注の引き負うべき残務作業として、明治前期中期に到るまでの日本近代社会文化全体の流れのなかで「社会主義」の術語＝概念がどのような

「あらわれかた」を見せ且つどのような「受け入れられかた」を^{しる}印したか、というテーマについての追求をおこなわなければならない。しかし、幸いにもと称すべきか不幸にもと称すべきか、このテーマに関してはマルクス主義陣営に属する御用著作家によって公刊された著作物がそれこそ山積している（というのも、従来、共産党もしくは社会党のお墨付きを頂戴した著述家以外にはこのテーマで執筆することを許されなかったからである）ので、そのうちのどれを《^{サンプル}見本》に引いておいたらいいか、却って困惑するくらいである。本補注執筆者なりに勘考を重ねた結果、如上の^{お墨付き}刊行物の中であって^{しか}も所謂「冷戦構造終焉」、ないし「ソ連邦崩壊」、以後となつてさえ比較的（残念であるが、比較的 *relatively* の形容副詞を取り払うことは最早^{はや}二度と出来ない）公平＝客観的な学問記述でありつづける（従つて、^{とき}時の^{ふるい}篩に堪えて今後も生き延びるであろうところの）秀作として、細川嘉六監修／渡部義通・塩田庄兵衛編『日本社会主義文献解説』（一九五八年二月、大月書店刊）を挙げるのが、最も良策ではないかとの結論を得た。もともと《文献解説》annotation の役目を果たすべく書かれた著作であり決して《プロパガンダ》propaganda を目的として無根拠＝無責任な煽動的な言辞のありつたけを書き並べた印刷物ではなかったのだから、批判や淘汰にも堪え得るのは当たり前だ、と言つてしまえばそれまでだが、ほんとうは、この書物の初版原型が作り上げられてゆく過程において戦時下特高警察のあの冷酷残忍な弾圧の手を掻いぐぐる^{なみだ}涙ぐましい努力が積み重ねられてあり、その努力あつてこそ、第二次大戦後の新版が素晴らしい出来ばえを示すこともあり得たし、いままた、斯く冷戦構造終焉後の厳正なる淘汰に堪えて生命を保ちつづけることもあり得たのである。（このことは、われわれに対して、どのような著作活動が時間の淘汰に堪えて後世まで生き残り得るか、という問題について「教訓」を与えてくれているような気がする。）

戦後新版の『日本社会主義文献解説』の巻頭には細川嘉六「監修者序」と渡部・塩田「編者のことば」が掲げられてある。まず「監修者序」に傾聴しよう。「本書は、すでに二五年前、『日本資本主義発達史講座』の一分冊として刊行された拙著『日本社会主義文献解説』を継承し、発展させたものである。／今度のこの仕事には、豊かな将来をもつ十数人の学究の献身的な協力をえ、じつに二年有余の日子が費された。これらの人は、各自多忙な自分の研究活動のなかから最大限に時間を捻出せられ、いうまでもなくこの著作からの報酬などは全く度外視されて、文字どおりの献身によって参加されたものである。いかなる困難をも、これを排して進まれんとする、これらの人の緊密な協力のもとに本書が成ったことを、私は心から誇りに思っている。／二五年前の私の述作は、もと大原社会問題研究所で公刊した『日本社会主義文献・第一輯』を土台にし、これをさらに深め、日本における社会主義思想の流れを正しく追及せんとしたものであつた。旧著で右の事実をあえて明示しなかったのは、当時の事情からして累が他におよぶのを、特に大原社研の先輩・同僚の諸氏におよぶのを、おそれたからであつた。とりわけ、いま想起されるのは、物故した大原社研図書館主任内藤赳夫君のことである。当時のその仕事に、彼は非常な努力を傾注された。本書が成るについても、こうした源流が脈々とつたわり成長してきたものであることを銘記すべきであろうと思う。」と細川は言う。書写しながら、担当者は、おもわず、胸に込み上

げてくるものを抑えかねた。つぎに「編者のことば」に聴こう。「ここに刊行する『日本社会主義文献解説』は、一九三二年に細川嘉六氏が上梓された同名の労作を継承して成ったものである。／およそ歴史的研究にとって前提的な手続きの一つは、資料・文献の存在状況と性質とを知ることであるが、細川氏の労作は、その点で日本の社会思想史および運動史の研究上に測り知れない便益をあたえてきたのであった。それはまた、諸文献が、それを生みだした時代に占めていた理論水準や意義を評価しながら『日本における社会主義思想の発展』を追及している点でも、異色ある画期的な『解説』であった。しかもその後今日まで、類書を他にみななかった点でも、独自の意義をもちつづけてきた。／一九五五年春ごろ、当時『日本社会運動史年表』（国民文庫既刊）の編集を進めていたわれわれの間に、細川氏の業績をひきついで、少なくとも敗戦前の体系的な文献解説書を出版しようとする企てがおこった。氏の旧『解説』は、当時の社会事情のために一九二八年初頭までの文献におわっており、以来四分の一世紀以上を経過して、続篇の刊行がひろく学界や一般から要望されてきたのに、その需要はみたされていないし、しかもこの仕事の性質が『年表』の作成と大いにつらなっていたからである。こうしてわれわれは細川氏にはかり、氏の監修をお願いしてこの仕事にとりくんだのであった。」

斯かる経緯を踏まえて作成されたがゆえに、この『日本社会主義文献解説』一冊は比較的（編者は「日本における社会主義思想や理論がより科学的なものへ——マルクス主義へ発展してきた過程を、運動と文献の関連から見つめうるように編集すること」に特に力点をおいた、と書いている歴史観は、やがて破産＝崩壊を迫られることになった）公平＝客観的な学問記述でありつづける余地を残した。以下、「概観」の記述のうち、「I 一八六八（明治元）——一九一一（明治四四）年／自由民権——社会民主党——平民社——幸徳事件」（執筆者は藤井松一・大原慧）を引用するが、この「概観」もまた比較的公平＝客観的なスケッチになり得ているとの当方判断に拠っている。明治年代における「社会主義」の理論と運動は、だいたい、これにて過不足無く描写し得ていると言ってよいのではないかとおもう。

1

明治維新によって、日本は封建国家から近代的国家への転換の第一歩をふみだした。その変革はもとより、封建的土地制度を徹底的に廃棄し、新しい階級の手に権力をうばいとするという意味でのブルジョア革命ではなかったが、近代資本主義国家への出発点としての歴史的意義をもつものであった。

一八六八年（明治元）徳川幕藩体制は崩壊し、絶対主義天皇制政府がうまれたが、この明治専制政府に対する闘いは、いわゆる自由民権運動として、明治七年の土佐立志社を中心とする国会開設請願運動を起点に、貧農・都市貧民をはじめ、ひろく国民各層をまきこみ展開した。藩閥専制政府内部の反対派である板垣らによって口火を切られたこの自由民権運動は、多くの限界をもちながらも、その本質においては、わが国における最初のブルジョア民主主義運動であった。この自由民権運動をつうじて、ブルジョア民主主義的政治思想が発展し、それはしだいに革命的民主主義思想に高まっていった。

すでに福沢諭吉、西村茂樹、西周ら「明六社」同人によって、先進欧米諸国の民主主義思想が輸入・紹介されたが、その天賦人權論・立憲政治理論および国民主権論は自由民権運動の思想的支柱をなすものであった（福沢諭吉著『学問ノススメ』、加藤弘之著『真政大意』など）。自由民権運動は、民撰議院設立の要求をもって出発したが、人民の言論・集会・結社・信仰・思想・学問の自由など、ひろく絶対

主義専制支配に対して、ブルジョア民主主義の実現をもとめる国民的闘争へと発展した。その闘いの中に、人民主権や共和制の思想が、また人民の革命権・抵抗権（圧制政府を顛覆する権利）の思想が自由党左派の理論的指導者、植木枝盛や中江兆民らによって掲げられたことを見おとすことはできない。

明治一四年以後、政府のデフレーション政策（松方大蔵卿の紙幣整理政策）をテコとする原始的蓄積の強行の中に、自由民権運動は、いわゆる「上流の民権派」をのりこえて発展し、農民・都市貧民を主力とする「激化の諸事件」（福島・群馬・加波山・秩父・飯田・静岡など）があいついで起ったが、その過程で、ロシアにおけるいわゆる「虚無党」＝ナロードニキ（人民主義者）の思想や運動が紹介された。それは自由民権運動に大きな影響をあたえ、その中から、明治一五年樽井藤吉らの「東洋社会党」が生まれたことは注目にあたいする。

明治一四年一〇月、わが国における最初のブルジョア民主主義のための単一政党たる「自由党」が結成されたが、その中核であった改良主義的ブルジョアジー・地主層は、闘争の激化のまにに戦線から離脱し、絶対主義権力との妥協の道をすすんだ。しかし、民権左派に指導された民衆は、自由党幹部のこの妥協をのりこえ、はじめて人民主権の思想をうちたて、人民革命権の思想に到達した。この指導者が士族インテリ、あるいは豪農・豪商ら半封建的階級の出身であり、その階級的弱さが多くの面にあらわれ、闘争の発展を妨げた点もあるとはいえ、彼らが国民的闘争の過程で、この革命思想と全国的政治闘争を、はじめてわが国民のなかに育てたことの歴史的意義を無視することはできない。

明治六年にはじまる地租改正事業をテコとしてなされた、政府の保護育成政策による急激な資本蓄積の不均等は、官営ないし政商的特権資本の軍事工業と零細マニュファクチュアとの共存を必然的にした。そして、マニュファクチュアないし零細工業における広範な労働者層が、原生的な労働関係のもとに全く無組織のままに放置されていたこと、またさらに、膨大な農村過剰人口が半プロレタリア的な潜在的・停滯的失業状態におかれていたことが、労働者の家計補充的・出稼の性格を規定した。

このような工場労働者の中で圧倒的な比重をしめる女子労働者は、短期の「出稼工女」として農村から工場地帯へと流出した。したがって、きわめて流動性が高く、そのことは彼女らのきわめて低劣な労働条件を規定する条件であった。だが、明治一九年の甲府山田町雨宮生糸紡績女工のストライキをはじめとして、長時間労働と賃金切り下げに対して、女工の争議がたたかわれたことは、たとえ自然発生的なものであるとはいえ、特筆すべきことである。

また一方、各地の炭坑および鉱山における奴隷労働的な苦役をめぐる騒擾・反抗がすでに明治初年いらい生野銀山や佐渡金山に発生した。これら鉱山労働者の騒擾のなかでもっともはげしく、かつまた、広く社会の関心の的となったものは、明治五、一二および二〇年の三回にわたって勃発した高島炭坑坑夫の暴動事件である。三宅雄二郎主宰の反欧化主義団体たる「政教社」の機関誌『日本人』は、はじめ高島炭坑問題を取りあげ、その坑夫虐待の実況を暴露し、「三千の奴隷を如何にすべきや」（第九号）「輿論は何にが故に高島炭坑の惨状を冷眼視するや」（同号）と訴えた。

自由民権運動に対する弾圧と原始的蓄積の強行のうちに、明治二三年には明治憲法の成立と帝国議会の開設とともに天皇制絶対主義は、半封建的土地所有制度を固有の基礎とし、特権大ブルジョアジーと国家資本を支柱として確立したが、その年はまた同時に、わが国における最初の資本主義恐慌の勃発した年であった。この時期を画期として近代的社会問題・労働問題があらわれはじめたが、以上のような原始的蓄積期において抬頭した自然発生的な社会運動・労働運動は、それ自体、明治三〇年以降に展開された近代労働運動への先駆的意義をもつとはいえ、まだ社会主義運動ということとはできない。なぜならば、当時においてはまだ社会主義が運動の指導的理論とはならず、プロレタリアートの歴史的使命が自覚されるにはいたっていなかったからである。

明治一五年、および明治二二年にそれぞれ「車会党」と「同盟進工組」が結成されたが、それはいずれも古いタイプの手工業的職人の指導のもとにつくられた、小生産者の意識の抜けぬ同業組合的性格のもので、まだ近代労働組合ということとはできない。

明治二三年議会政治の開始とともに、かつて自由と民主主義をめざしてたたかった自由党は、急速にその革命性を否定しつつ、改良的ブルジョアジーと寄生地主との同盟が主導権をにぎり、板垣らブルジ

ヨアの上流民権派の妥協的色彩が露骨となっていたが、植木枝盛、中江兆民の流れをくむ左派下流民権派の急進ブルジョア自由主義者は、労働者階級をめぐる新しい社会問題の発生に関心を寄せはじめた。そのような中から、自由党左派の領袖である大井憲太郎は、明治二二年一二月『あづま新聞』を創刊して労働問題を論じたが、明治二四年には自由党を脱党して「東洋自由党」を結成するにいたった。

東洋自由党が創立されると、党の政綱を実現するため、「普通選挙期成会」「日本労働協会」「小作条例調査会」が組織された。同党は、「その綱領には財政を整理し、国家経済の許す限度に従ひ、漸次民力の休養（殊に労働者の保護）を為すこと等の文字ありたりき」（片山潜・西川光二郎共著『日本之労働運動』）といわれるように、労働者保護を綱領に採用した最初の政党であった。その「貧民労働者の保護」という形の労働運動と普選運動とがまだ本格的な運動をこころみるにいたらぬうちに、同党は明治二六年一二月に解散した。それは、小ブルジョア急進主義が労働運動に転換してゆく過渡形態であった。

これらの自由党左派の指導による諸政党の運動は、いずれも特異な歴史的地位をしめるものであるが、社会主義運動の出発点とみることはできない。なお、東洋自由党の結成と年を同じくして、酒井雄三郎、大道和一、佐藤勇作らによって、わが国最初の「社会問題研究会」がつくられている。

すでにのべたように、明治一〇年代後半から二〇年代後半にかけての社会運動・労働運動は、いまだ社会主義をその指導理論とするにはいたっていないが、先進欧米諸国からの社会主義思想の輸入・紹介あるいは独自の研究は、明治一四年ごろから行われはじめた。この時期における社会主義思想の宣伝・流布に大きな役割をはたしたものは、徳富蘇峰の主宰する「民友社」の一派、中江兆民の一派、および自由党左派である。

明治一四年四月、小崎弘道の「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」を掲載した『六合雑誌』は、ユニテリアン派プロテスタント教会の宣伝雑誌として創刊されたが、その後キリスト教社会主義の立場から社会主義思想紹介の論文を数多く掲載し、進歩思想の発展に貢献するところが大きかった。なおこの期間には、樽井藤吉の『東洋の虚無党』、西河通徹訳『露国虚無党事情』、原田潜『自由提綱財産平均論』、中江兆民主宰『政理叢談』などがあらわれているが、わが国の社会主義思想の発展にもっとも多く貢献したものは、徳富蘇峰の『国民之友』である。かれは後には超国家主義者に変節したが、当時は自らの思想的立場を「平民政主義」とよび、進歩的思想家としての役割を担っていた。同誌は社会主義思想についての数多くの、しかも注目すべき諸論文を発表し、また「平民叢書」として例えば『現時之社会主義』を発行し、多くの知識人の目を社会主義にたいして開く役割を果たしたのである。

このように、この期間には、自由民権思想から更に、社会主義思想の輸入・紹介が行われはじめたが、それはいまだ一部の急進的知識階級による啓蒙・普及運動の域をこえず、社会主義思想は労働者大衆をとらえるまでにはいたらなかった。社会主義思想がわが国に根づき、労働者階級の解放のための理論としてようやく展開されはじめるのは、日清戦争後をまたねばならない。

2

日清戦争の勝利の後、ようやく確立した日本の資本主義は、一方では、依然として半封建的な土地所有制度を物質的基礎としながら、他方では、世界資本主義の帝国主義段階への発展に照応するために軍事化を強行し、急速に帝国主義の方向にすすんだ。

日清戦争は、清国からの賠償金の流入とあいまって日本の資本主義を確立させ、綿紡績工業、軍需工業、金属工業、造船業などを飛躍的に発展させる機会となった。しかし、軍事産業を中心とする戦後諸産業の勃興と確立は、もとより賠償金の資本化だけではおいつかず、さらに地租増徴・増税・公債などによる労働者・農民からの収奪を前提として遂行されたのである。このような情勢を背景に近代的な労働者階級が発生し、その組織が形成され、資本にたいする新たな闘争が開始された。

明治三〇年四月、「職工義友会の檄」（職工諸君に寄す）を出発点として、七月には「労働組合期成会」が創立され、一二月には期成会を母胎として「鉄工組合」が結成された。翌三一年二月には、上野＝青森間の列車を完全に停止させた歴史的な「待遇改善ストライキ」が起り、この闘争のなかから「日本鉄道矯正会」が生れた（四月）。八月には「活版印刷工組合懇和会」が組織された。

成立期における労働組合の性格は、労資協調にもとづく職能別労働組合であったが、運動の発展は、

ただちに社会政策立法の要求、普通選挙請願運動へとすすんだ。

一方、農村では、地租その他の諸税の軽減、鉄道・道路等建設のための不当な土地収用反対、天皇制国家に収奪された林野とりもどしなどの要求が全国いたるところで開始された。とりわけ、「足尾鉍毒事件」は、国家権力ならびに特権的ブルジョアジーにたいする農民の闘いとして、労働者・知識人・社会主義者らの支持をえて展開された。

労働者の組合組織化ならびに、農民闘争の激化に恐怖した山県内閣は、明治三十三年三月「治安警察法」を制定して、労働者・農民の組織と運動を徹底的に弾圧する体制を整えたが、労働組合運動は、はやくも社会主義思想と結合しはじめた。「日本鉄道矯正会」第二回大会（明治三十四年三月）は、組合員に普選運動に参加するよう指令するとともに、いち早く、社会主義的立場を宣言した。また、四月三日、向島公園で政府の弾圧をけて開催された「日本労働者大懇親会」には数万の労働者が集まり、「労働者保護、幼年婦人労働者の保護、労働者の完全無料教育、普通選挙権、毎年の定期集会の開催」を政府に要求する決議を満場一致で採択した。

社会主義理論の研究も、明治三十一年「社会主義研究会」が設立されたことによって本格的にはじまった。社会主義研究会は、はじめ「社会主義の原理とこれを日本に应用するの可否」を研究する学術団体として発足し、毎月一回、サン＝シモン、フーリエ、ラッサール、ルイ・ブラン、プルードン、マルクス、ヘンリー・ジョージなどの社会主義思想を紹介した。しかし、当時にあつては、「科学的社會主義」と「空想的社會主義」との歴史的立場づけ、「国家資本主義」と「社会主義」との区別さえ明らかにされない状態であり、また、会員のなかには、キリスト教徒、社会主義者、その反対者、人道主義者など、さまざまな思想の持主が混在していた。

しかし、学術団体として発足した社会主義研究会も、労働者・農民運動の発展に刺激され、三十三年一月には、はやくも安部磯雄の会長就任とともに実践的態度をとり、研究会を「社会主義協会」と改称した。一月には普通選挙の問題を論じ、五月には工場法に関する討議をなし、「社会主義協会私案」を作成するとともに、工場法成立促進運動に積極的に参加することを全員一致で決議した。協会の構成員も学者を中心とする団体から、しだいに社会主義者中心となり、労働者・学生・新聞雑誌記者等の参加が多くなっていった。

明治三十四年五月二〇日結成された日本における最初の労働者政党「社会民主党」は、このような社会主義理論研究の発展と労働運動の高揚とを背景に組織されたものであり、その「宣言」は、社会主義理論研究成果の日本への適用の集約的表現であった。社会民主党は、民主主義的諸要求を綱領に掲げ、暴力革命に反対し、普選運動を当面最も重要な任務とし、議会主義によって平和的・合法的に社会主義社会を実現するという、穏健そのものの結社であったが、即日禁止された。

労働組合組織の自由を奪われ、労働者政党の結社が禁止されていたにもかかわらず、社会主義思想は、この時期にかなり普及・発展した。なかでも、社会主義協会の活動はめざましく、海外の社会主義思想をひろく日本に紹介するとともに、明治三十五年から三十六年にかけて一八二回の「公開集会」を開催した。その結果、社会主義思想はしだいにひろまっていった。しかし、これらの理論・思想は労働者階級の日常闘争との結びつきを妨げられていたために、革命的なマルクス主義理論・思想の把握にまで高まることはできなかった。

このような事情は、この時期における社会主義理論の最高水準をしめしている幸徳秋水・片山潜の業績のなかにも典型的に表現されているとともに、「社会主義」という言葉が福地源一郎や大隈重信らによってさえ、俗流化されてもてあそばれたことのなかにも反映している。

『社会主義神髓』（幸徳）、『我社会主義』（片山）の二著は、明治の社会主義者が到達した社会主義理論の最高水準をしめしているが、両者の理論的相違は、そのまま労働運動にたいする両者の結びつきの差異を表現しており、そこに、明治の社会主義者たちが、社会主義革命の担い手としての労働者階級にたいして、どのような認識をもっていたかが典型的に表現されている。幸徳は、ここで、はやくもマルクス＝エンゲルスの著作を読み、「唯物史観」に接近していたにもかかわらず、労働者階級の歴史的役割を理解できなかったために、社会主義実現の方法に関しては「普通選挙運動による議会主義革命」に終

らざるをえなかった。これにたいして、キリスト教的社会改良主義者として出発し、その後、労働者の組織活動のなかで社会主義者にしだいに成長していった片山は、理論的にはまだ混乱していたとはいえ、はやくも労働者階級の歴史的地位を直観的に把握していたのである。

日露戦争が開始されると、社会主義者たちは、「平民社」の活動を中心に、週刊『平民新聞』、『直言』を発行して反戦・平和の闘争を展開した。当時の社会主義者の中には、フランス的な自由民権思想、ドイツ的な議会主義的合法主義、キリスト教的人道主義などの思想が混在していたにもかかわらず、日露戦争勃発の危機にあたり、ならびに戦時をつうじて反戦・平和の中心目標に結集し、政府のあいつぐ弾圧、生活の困窮にも屈せず、最後まで一貫して主戦論にたいする「勇敢な輝かしい闘争」をつづけたのである。

反戦運動にたいする弾圧は激しくなっていた。新聞はあいついで発行停止となり、社会主義者の集会はいたるところで禁止され、社会主義協会は解散させられ、労働者の園遊会まで禁止された。また、社会主義者には、国賊・前科者・露探（ロシアのスパイ）など、国民から孤立させるためのあらゆる悪口があげられた。

以上のように、わが国の社会主義運動は、労働者階級の組織的運動の開始とともに成立し、なによりも民主主義の確立を要求し、また反戦闘争として展開された。このことは、日本資本主義の半封建的・侵略的な性格に対応するものである。

しかし、労働者階級との結びつきを切りはなされながら「ガラス張り」の中で活動し、議会主義的合法主義の枠を抜けることのできなかったこの時期の社会主義運動は、天皇制政府の兇暴な弾圧にうちかつことは不可能であった。このことは、労働者階級が未成熟であり、社会主義者の側でも労働者階級の革命的階級としての歴史的任務に無理解であり、したがって労働者階級の組織化と、それとの結合に社会主義者が十分に積極的でなかった当時の歴史的制約をあらわしている。

3

日本資本主義は、日露戦争の勝利によって南樺太・朝鮮を合併し、軍事力を背景に満州・中国市場への支配を強化して帝国主義国としての地歩を確立するとともに、他方において、戦費外債・外資導入などによって英・米などの先進独占資本主義諸国への従属性をますます強めることとなった。

すでに戦前から銀行・紡績などを中心に行われた資本の集積・集中は、戦争時の好景気と戦後恐慌（明治四〇～四一年）とを通じて重工業・化学工業・電力事業など、広範に独占を形成・発展させ、とくに、三井・三菱・住友をはじめとする「財閥」資本は、国家資本ならびに外国資本と結びついて、その力を強めた。

「挙国一致の聖戦」と「愛国主義」運動のスローガンのもとに、戦争のあらゆる犠牲を背負わされてきた労働者・農民は、戦争の進行に伴う物資の欠乏・労働強化などによる生活苦が累積するにつれて、戦争の矛盾を身をもって感じはじめた。横浜電車・日本新聞・播州塩業・浦賀ドックなどの労働者は、すでに戦時中から「賃上要求」「賃下反対」の争議にたちあがった。とりわけ、国民のつもりつもった不満は、戦争の終結とともに爆発し、明治三十八年九月五日に開催された「屈辱講和反対国民大会」の暴動化となった。極端な軍国主義者、野心的な政友会員などによって指導された「ポーツマス講和反対国民大会」の意図は、日露戦争の勝利による日本の略奪物の不足にたいする不満を表明しようとしたものであったが、そこに動員された国民は、大会指導者の意図をはるかにのりこえて実力による大衆行動を展開し、東京全市を二日間にわたって騒擾にまきこんだ。東京の焼打ち事件は、横浜・大阪・名古屋・神戸、その他各地に動揺をおこさせ、それ以降明治三十九年には、軍需工場の労働者を中心に「賃上要求」「首切反対」闘争が各地にひろがった。

「反戦」という共通の目的のもとに、多様な思想を持ちながら「平民社」に結集して活動してきた社会主義者たちは、戦争の終結によって変化した情勢のもとで、「平民社」を解散し、分散した。

石川三四郎、木下尚江、安部磯雄らは、キリスト教社会主義の立場で『新紀元』（明治三十八年一月）を創刊し、「万国の平和主義と普通選挙制度の実施」を抱負として活動し、唯物論の立場にあった西川光二郎らは『光』（同年同月）を創刊し、週刊『平民新聞』『直言』の伝統を継承し、日本社会党成立後は、

その中央機関紙となった。堺利彦は『家庭雑誌』を発行して生活の資としていた。

「日本社会党」の結成（明治三十九年二月）は、各地に分散していた社会主義者の勢力を一つに結集する役割を果し、また、「普通選挙連合会」を中心に実践活動にのりだし、三十九年三月、九月の二回にわたって「国家社会党」と共催して「東京市電値上反対市民大会」を指導し、勝利して大衆との結びつきをすすめ、党員もしだいに増加し、数ヵ月のうちに全国に一五支部が設立された。

明治四〇年から四一年にかけておこった戦後恐慌は、労働者階級の窮乏を深め、階級闘争を激化させた。すでに前年末、大阪砲兵工廠の労働者は一〇日間にわたるストライキを闘ったが、南助松・永岡鶴蔵らの指導で「大日本労働至誠会」を組織していた足尾銅山の労働者は、四〇年二月四日から「待遇改善要求」ストライキに入った。労働者のたえがたい不満は会社側の「要求拒否」にあつて爆発し、組合の統制をのりこえて暴動化し、七日軍隊の出動によって鎮圧されたが、これをのろしに労働争議は、長崎造船・北海道幌内・夕張炭鉱・別子銅山とあいついでおこり、四〇年のストライキ件数は一六五件を数え、これまでの最高を記録した。しかし、労働者の闘争はしばしば軍隊の出動によって弾圧された。

明治四〇年一月、『光』によつた社会主義者と『新紀元』にあつた石川らは合同して日刊『平民新聞』を発行した。このとき、安部、木下らは運動の第一線から姿を消し、それ以降、キリスト教社会主義者は、運動の初期に果たしたような積極的役割を失った。

日刊『平民新聞』は、社会主義者の手になる最初の日刊新聞であり、社会主義実現の手段については、これまでと同じく「普通選挙にもとづく議会主義」の方向をとっていたが、この年、四〇年二月、幸徳秋水が「余が思想の変化」を掲載し、議会議政化した社会主義の腐敗・墮落を世界の現状に照して鋭く批判し、「直接行動」^{ダイレクト・アクション}を主張したことが、社会主義者の間に大きな波紋をまきおこし、思想的対立を表面化させ、日本社会党第二回大会を目前にひかえて、堺、田添鉄二、石川らを加えた論争が展開された。この論争は、大会において最高潮に達し、「党則の改正」「運動方針」を中心に激しく闘われ、「直接行動論」「議会議政論」「折衷論」に分立し、火花を散らして衝突した。対立をはらんだ大会は、結局評議員提案の折衷論に落ちついたが、その原案は「直接行動論」と「議会議政論」との対立を考慮した苦心の折衷案であり、幸徳を中心とする「直接行動論」が、伝統的な「議会議政論」にたいしてあなどることのできない勢力になってきたことを証明するものであった。

これらの論争は、社会主義者たちが、日本社会主義運動の戦術を反省した最初のものとしての意味をもっている。とりわけ、幸徳の「直接行動論」は、日本の社会主義がこれまで歩んできた議会議政的合法主義が、権力の前にいかに無力であつたかを反省したうゑに築かれたものであり、ロシア第一革命を先頭とする世界の革命的潮流に鋭敏に呼应しようとしたものであった。そして幸徳の「直接行動論」の底には「天皇制」への批判の萌芽がみられたが、この問題は発展させられなかった。そして幸徳の主張は、小ブルジョア急進主義の一変種であるアナルコ・コミニズムの立場に立っていたために、労働者階級の組織化と政治闘争化の課題にねばり強く立ち向かうことができず、革命的情熱の発散が、かえつて暴動是認、一揆主義に転化する危険性をもっていた。第二回大会決議の通過を理由に日本社会党が結社を禁止され、日刊『平民新聞』も発行禁止されたのち、「直接行動派」と「議会議政派」との対立はしだいにげしくなつていった。

明治四〇年六月、「大阪平民新聞」（のち『日本平民新聞』）、『社会新聞』があいついで創刊された。前者は、森近運平によつて編集されたが、幸徳を中心に、かれの思想に影響された堺、山川均、大杉栄らが支持し、「直接行動派」の機関紙の観を呈し、後者は、「議会議政派」片山を中心に、田添、西川らが参加した。片山、田添らは、第二インターの正統派をもつて自任し、労働者階級を労働組合に組織し、普選運動を通じて社会主義を実現するという方針をとつたが、幸徳派はこれを「国家社会主義だ」と嘲笑した。さらに明治四一年二月、「直接行動論」に影響された西川光二郎は、『社会新聞』を脱退して、赤羽一らと『東京社会新聞』を発行した。

『大阪平民新聞』にあつた堺、森近、山川らは必ずしも幸徳のアナルコ・コミニズムと同一の立場ではなく、いずれも、ほぼ第二インター正統派の立場にあつた。かれらは、議会議政・改良主義を批判するあまり、社会主義と無政府主義との区別を意識せずに無政府主義と結びつき、いたずらに、片山派

に「修正派」のレッテルを貼り、「総同盟罷工」論から「暴動是認」の思想にまで陥っていた。

各地に大規模のストライキ、鉱山暴動などがあったとき、労働者階級の組織と指導とが最も必要とされていたとき、社会主義者たちは、このように社会主義と無政府主義とを混同し、社会主義も、いわゆる第二インターの「正統派」と「修正派」とに分立・抗争していた。かれらはまだ、第二インター主流派の日和見主義を批判したレーニンやローザ・ルクセンブルグらの、革命的マルクス主義の進出を理解することができなかった。

明治四一年六月、堺、山川、荒畑寒村、管野スガ、大須賀里子ら一三名は「赤旗事件」で逮捕され、七月、これを契機に西園寺内閣にかかわって成立した桂内閣は、ますます社会主義者にたいする圧迫を強化した。「赤旗事件」につづいて八月には、「電車賃値上反対大会」の判決が確定し、反議会政策派の主要メンバーは、ほとんど獄中につながれた。

幸徳ら無政府主義者は、このような国民の自由と権利とを圧殺する根源である天皇制に批判をもち、その打倒のために革命的闘争を計画した。しかし、彼らは、天皇制の本質を政治機構として把握していたわけではなかったので、かれらの運動は、階級的大衆闘争を組織する方向にむかわないで、「天皇」個人にたいするテロリズムの方法でその目的を達しようとする焦った戦術が、そのなかの一部分子によって採用された。明治四三年五月、宮下太吉、管野スガらによる天皇暗殺計画を知った政府は、幸徳をはじめ、この計画には何ら関係もない数百名の社会主義者および無政府主義者を全国的に検挙し、暗黒裁判で、いわゆる「大逆事件」をでっちあげ、幸徳、森近ら、一二名を死刑に、一二名を無期懲役に、二名を八年および一〇年の有期刑に処した。

言論・思想・集会・結社の自由は極度に圧迫された。政府は「特高警察」を設け、社会主義者にたいする公然たる見張りや尾行とを強行し、狂気じみた弾圧をいっさいの社会運動に加え、国民の間に社会主義・無政府主義にたいする恐怖と憎悪の念をかきたてた。社会主義運動の「冬の時代」が到来した。

しかしながら、世界の批判を無視して強行した「大逆事件」の大弾圧は、かえって国民に天皇制への疑惑をよびさし、良心的思想家に天皇制と対決することなしには、いっさいの自由も解放もないことをさとらせはじめた。このような状態の中で、ひとり片山は『社会新聞』の発行をつづけ、労働者階級に呼びかけた。明治四四年末から翌年初頭にかけての東京市電ストライキの勝利のかけには片山の活動があり、その結果かれは投獄された。

以上のように、この時期の社会主義運動は分裂の苦しみをなめ、その力を一つに結集することができなかったのであるが、マルクス主義理論・国際社会主義運動・無政府主義の研究はたかめられた。

『社会主義研究』（明治三九年三月）は、堺によって創刊された最初の専門的な社会主義研究雑誌であり、『共産党宣言』『空想より科学への社会主義の発展』の翻訳、国際社会主義運動の歴史、現状報告、無政府主義の紹介をなし、森近・堺共著の『社会主義綱要』（明治四〇年一月）は、「唯物史観」「剰余価値」「階級闘争」の理論が、日本の社会主義者たちによって理解されはじめたことをしめしている。これと前後して『大阪平民新聞』紙上に「マルクスの資本論」が山川均によって、また安部によって『社会新聞』に紹介された。しかし、マルクス主義思想は、まだ一般論として理解されており、それを具体的な日本の社会構造の分析にまで適用することは後の課題となった。したがって、それに対応する運動の組織論や戦術論は導き出せなかった。

一方、この時期には、クロボトキンをはじめ数多くの無政府主義理論の紹介が合法・非合法でなされている。このことは当時の世界社会主義思潮の反映であるが、とりわけ、急速に独占段階に移行する戦後の日本で、階級的矛盾が激化し、労働者の闘争は自然発生的に高揚してきたにもかかわらず、階級的成長がおくっていた状況のもとで、小ブルジョア急進主義の一変種である無政府主義が影響をもったとみるべきであろう。

——以上の引用によって、われわれは明治時代全期をつうじて「社会主義」の思想および実際運動がどのような推移＝発展の道を進んでいったか、というテーマについての「必要最小限」の

基礎知識を再確認することが出来た。時代に真正面^{まっしょうめん}から立ち向かっていった《誠実の理性人》
牧口常三郎は、当面の重要命題である「社会主義」に関しても百パーセントの誠実さと理性とを
傾注し且つ完全燃焼させたはずである。そして、そのことが晩年における学問研究や宗教実践を
基底部で支えることとなったはずである。それゆえ、本補注担当者としては、ここでの過剰とも
見える引用（＝文献的論証）の作業を以てゆめ徒爾^{とじ}なる努力とは認めたくない。敢て大方の御理
解を賜りたき所以^{ゆえん}である。

なお、本項目に関連する別注釈として、次項目「3『社会党』と称し」の補注記事を是非とも
参照されんことを願います。